

# 川柳塔

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可  
昭和五十一年一月二十五日 印刷  
昭和五十一年二月一日発行 (毎月一日発行)  
創刊大正十三年 通卷五八五号



日川協加盟

No. 585

北川春巢追悼号

二月号



中島生々庵  
中島小石 共著

おしどり作家

待望の句画集

本年三月中旬発行

# 生々庵

中島生々庵  
中島小石 句画展

金婚を記念して

三月十六日(火)より

午前十時より午後七時まで

三月二十一日(日)まで

最終日午後五時まで

会場 画廊力ワチ

(心斎橋筋十合北隣)

ご希望の方には頒価 三千円(送料別)

川柳塔社

「旅人」以後の

## 麻生路郎作品 (33)

(傍島 静馬)

三十七年十月号

不朽洞句帖

土地が沈むとよ 平気でいる庶民

豚まんをむさぼり食いぬ恋なきBG

残暑きびし 光りをハネ返す額がく

地藏盆恋の手習するもよし

鍵一つ安心するも女なり

無収入の日もあり苦にもせず生き

秋は秋だけの淋びしき酒にする

巡查を殺ろして逃げられるつもりかね

年寄りの日にビール一本の欲となりたり

大阪通信病院川柳会「水いらず」

水入らずミシンの横で飲んでいる

杏林川柳会

しぶちんの彼には彼の主義があり

南海電鉄川柳会「ドライブ」

ドライブに連れて行きたい方が来ず

水谷竹荘氏の女のシリーズ、引用句中より  
しゃぶるのをおぎのうてやる共白髪

## 心の折り目

辻うらを見てから握りこぶし振る  
絵で見れば見て来たような竜の顔  
初日の出団地の窓のそっけなし  
おちよぼ口こんな仕事も串団子  
美事な孤独よろめかぬ水中花

中島生々庵

一番近くて遠いのは元日と大みそか と清  
少納言が言ったそうだ。実際 前の日の大み  
そかと一夜明けた元日の朝では こうも気分  
が変わるものか。明け方まで戦争の様に働いて  
居た人も、元日には大虎になって二日酔の寝  
正月をきめこんだり、日本国中 天下ご免の  
はればれ気分、のどか顔である。

柳田国男氏は、正月は四季循環の境であ  
り、遠い昔から、旧年の心配ごとをさざりと  
捨てて、新しい願いを立てる日だと信じられ  
てゐるからだと言う。

日常の都市生活は人間の本质まで変えて終  
われそうで、いつ迄生き残れるだろうかと気  
を遣う公害、そうした不安が元日の朝にはど  
こかに吹つとばされている。ことしの三か日  
の様に澄みきった空のかなたに六甲や生駒の  
山並が見えたりすると、晴れ着に飾った娘の  
子ならずとも平日に忘れて居たものをとり戻  
す。この心の折り目が芽出たいと言うのだろ  
う。私はこの折り目を大切にしたいと思う。

座右の句

しあわせな家 年寄りがよく笑い

(春 巢)

私の句

それぞれの鍋それぞれの味で煮え

川口 弘生

# 川柳塔二月号目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

心の折り目

ああ 二月号

誹風柳多留廿五篇研究

清博美・八木敬一・紀内恒久・青木迷朗・西原 亮  
鈴木 黄・室山三柳・入江 勇・岡田 甫

川柳塔 (同人作品)

水煙抄

麻生路郎物語 (14)

秀句鑑賞 (同人吟)

近作

百人一首と川柳 (20)

愛染帖

51年度二賞中間発表

中島生々庵 (1)

不二田一三夫 (2)

(九)

西尾 菜選 (4)

菊沢小松園選 (32)

東野大八 (22)

浜田久米雄 (48)

香川酔々 (49)

富士野鞍馬 (44)

橘高薫風選 (42)

諸家 (46)

諸家 (46)

諸家 (46)

## ああ 二月号

不二田一三夫

二月号のここへ北川春巢氏にご執筆ねがうことになっていたので、昨年12月27日夜、春巢氏のご長男睦彦氏から「きょう午後2時48分に永眠しました」という悲報だった。

急遽本号を「北川春巢追悼号」に切り替えねばならないことになった。が、このアナは？となると皆さんも年末年始でご多忙であらうし、またピンチヒッターである。

あの時も二月号だったな……なぜか、二月号にかかると心がくもったことを思い出した。合本を調べてみると、

41年の二月号は「きょうだい作家」を特集している。執筆者は川村好郎・松江梅里・西出一栄・酒田清子・正本水客・辻白溪子・石倉旅風・寺田花宵諸氏となっていて、別にどうということはないが、梅里氏と清子さんは故人となっておられる。

42年の二月号は「真鍋一瓢君逝く」を若柳潮花氏が追悼文を寄せておられる。一瓢氏は豆秋氏と同じように焼酎党で好作家だった。43年の二月号は「水谷鮎美追悼句会」の記事を長谷川三司氏が送稿してこられた。鮎美氏は路郎先生から離れ、逝去当時どこの柳社

顯照院積宝医居士(弔辭)

西尾 葉・市場没食子・若本多久志・川村好郎  
正本水香・児島与呂志・山田季贊・菊沢小松園

中島生々庵

(25)

三人句集を読んで

八木摩天郎

(47)

噫 井上湧三氏

西尾 葉

(50)

悼 池田古心氏

市場没食子  
本田恵二朗

(51)

一分間の柳論

若林草右

(57)

雅号ぶっちゃげばなし

宮川珠笑

(55)

50年度本社句会最多入選

史好・新之助

(63)

初歩教室

本田恵二朗

(54)

大萬川柳「酔う」

川村好郎選

(56)

柳界展望

(庸佑・整理)

(58)

本社新春句会

市岡暁舟

(60)

各地柳壇(佳句地10選)

小林由多香選

(64)

一路集

小林孤呂二選

(52)

〔婚礼〕

浜野奇童選

(53)

〔寒波〕

(二三夫・葉子)

(69)

〔閨年〕

編集後記

座右の句

海へまで流れて蛙あわてたり

(豆 秋)

私の句

春の宵デツカイ喧嘩見たくなる

大路 美幸

にも属していなかったが、路郎門下の重鎮として活躍した人であった。そして筆者の長谷川三司氏も今は故人となっている。

44年の二月号は「川上三太郎氏を悼む」を中島生々庵主幹が執筆。

45年の二月号は「ああ弓彦君」を川村好郎氏が「いなぎ」弓彦氏のありし日を偲んで執筆。

46年の二月号は「清水白柳追悼号」であった。氏は45年11月13日に急逝され、12月号はもう校正が出ていたし、かと云って新年号を追悼号にして新年句会を追悼句会にも出来な

かったので二月号にすべてを繰り越した。このことに関し、ほくへの非難が相当に強かったが、幹部諸氏と協議の結果、あのような処置をとったまでのことである。

47年の二月号は「川岡靈眼子逝く」を未亡人の川岡美須栄さんが書かれた。

48年の二月号は、平穩無事だった。二月号は年末から年始へかけて編集するので、この年だけはのんびり出来たようであった。

49年の二月号は「故垂井葵水氏に」と題して中筋三幸氏が筆をとっておられる。

50年の二月号は「鉄児さんを偲ぶ」と題して浜野奇童氏が切々の追悼文を寄せられた。

そして、51年の二月号は、「北川春泉追悼号」となり、井上湧三氏(元警察病院長)と「かぐみ」川柳社の池田古心氏らの追悼記事まで載せねばならないことになった。謹んで哀悼の意を表します。



西尾 朶選

泉大津市 村上春巳

侃さえもUSAに頼る国

三億円一億好きなことを言い

社長室初代社長に髭がない

停退へもう一息のサロンパス

おばあちゃんが来て張ってった子供るす

はいちよう裸になった広さなり

はぐれ鹿もしや革マル派かも知れず

桜井市 岩本雀踊子

王子さまのように内孫寝ているぞ

大空へ飛べぬ手品師の鳩である

十指では足りぬ園児に数がある

棘のある言葉は私も持っている

退化する男の髪は長かりき

街の悲鳴きこえる街は十二月

香川県 三井 醉夢

地に戻る桐一葉の舞い納め

月が出て旅人となる瀬戸の海

青年の人生感に撫然たり

中年の居直りを見た年の暮

救急車酔いどれ天使目をさます

凋落の行く末おもう虫めがね

八尾市 高杉 鬼遊

凧に落葉は旅へ連れだされ

敗戦の日から軍歌は温かし

もの書きの意志より太いペンを持ち

花好きのそれほど花の名を知らず

良心のままに生きれば君子とか

富士の山だれが画いても富士になり

青森市 工藤 甲吉

灰を掌にのせて人間など思い

生も無く死も無く魚は目を開き

手袋はやもめとなつてすてられる

亡妻三回忌(一・九)

朗かな人であったと三回忌

三回忌骨の温味が忘れず

大阪市 不二田 一三夫

倉敷市 野田素身郎

芸人の「喪中に付き」がなおさびし  
弱肉強食 けもの真似もしたくくなり

狂わない時計にがんじがらめとか

乱丁と落丁が一冊になる夫婦

黙禱に前のヒップを見ていたり

八尾市 宮西 弥生

糸切れてから侃 自由です

もうただの同伴ではないミンク

来年という逃げ道のある思案

泣きごとが嫌いなわたしで馬鹿になる

ひとすじの涙で馬鹿になってやる

岡山県 嘉数千代香

スト横行 これが平和のシンボルか

狂乱のドラムで景気呼んでいる

吹き溜り世のきびしさを見せて積み

つまずいた石の言葉を聞いている

頂天の風が冷たいひとりごと

藤井寺市 西 いわを

冬の部屋みかん剥く手の暖かさ

甘酒は毛氈敷いた色で飲み

蜂の巣も雨に濡れないとこ選び

健康なうちだ涙を流そうよ

柳友の計

白菊の朽ちても匂い未だ仄か

ラッシュアワーブーツを履いて遠慮せず

圧力に屈し特例またもうけ

質問にあわてて老眼鏡をかけ

手形おちる目処がどうにかつきゴルフ

落葉樹裸になって春を待つ

新宮市 大矢十郎

ポーナスが耳に逆う小商人

国ならば我家は発展途上国

出せば直ぐ暮しにひびく義理でもめ

良い知恵はないかとうまい頼みよう

神主でさえも神様には逢えず

宝塚市 傍島静馬

廻り道覚えて世の中丸く見え

朗らかに朗らかに癌の友見舞う

胃潰瘍にしては見舞いの仰々し

北山杉気ままなポーズ許されず

ポーナズ貯金職安通いへ勧めに来

竹原市 山内静水

タイミングはずすスパイク結びかえ

見せびらかすように二度目の妻をいれ

我社のホープ女の子にもてず

湯けむりの裸ポーズなどいらす

ふり向かぬ意地が崩れる曲り角

大阪市 本多柳志

着流しで来て氏神の初詣で

嫁った娘の日記に残る後遺症

メガホンは団地へパズーカ砲のように向け

慎重審議善処と決まる会議室

足して2で割って仲裁案が出来

岸和田市 高橋操子

童顔になって同窓会から帰り

同じ趣味譲らぬ意見持つ夫婦

エチケット男はきらいな言葉かも

苦勞した手だなと思う猫目石

十二月ちっちゃい義理を思い出し

島根県 堀江正朗

白杖を身構えてみてもそれは音

光なき光を熱として生きる

陽が落ちてきたのか寒さ通り過ぎ

うたた寝の目醒めて独り寝て独り

うぬぼれが冷めれば一箇の荷に過ぎず

兵庫県 遠山可住

どう整理しても確かな赤字です

追いつけぬ深さを刻む鏝と知る

うつむいて歩く男にある不平

良縁良縁と言われだんだん腹が立ち

先輩面して楽屋まで握手に来

大阪市 吉田圭井堂

喜寿近しノルマノルマでまだ逝けず

癌研が賄賂の葉で皆いかれ

売れ残ったらとおかず屋の疝氣病む

よばよばに占領された診療所

梅過ぎてさくらばんやりして居れず

倉敷市 水粉千翁

丙辰の春

竜歩く仰げば雲の無い平和

ひとり居を秋はおんなのために昏れ

散るもよし一期一会の秋の彩

落葉踏むふまれる彩に語りかけ

くれないの日記おんなは秋を閉ず

尼崎市 黒川紫香

九州を廻る

寄り合うて坊ノ津部落浪に生き

不意打ちに車の窓へ都井の馬

断崖の滝高千穂は霧しぶき

草千里阿蘇は時雨の中にいる

山迫る杖立湯気にかかる橋

鳥取市 河村日満

日々徒食まだ飽くところまでゆかず

年頃が合うて女中のいい奉仕

風鈴の悲鳴になった冬の風

上見れば下あり赤い羽根を買う

くらしにくい世だと鳴いてる虫かとも

京都市 都倉求芽

結局はしきたり通りに済ませとき  
柔い掌で闘争だ闘争だ

音もなく流れる水に似て夫婦

万人に同じ愛想の自動ドア

陽だまりの犬にあくび感染される

八尾市 大路 美幸

君の瞳に私を見てから夫婦です

好きだから好きと言えない時もある

ニュータウン雀のお宿のあったとこ

SOSやっぱり男が先に打つ

星屑ヘドンキーホーテの千鳥足

竹原市 三宅 不朽

メルヘンのない町曲った道がなし

美しい女だと思ふ竹林

子守唄しらない女乳を捨て

忍従の音か母のかむおしん香

愛恋の青磁のごとく逢う初老

倉吉市 奥谷 弘朗

表向き飾って小役人が生き

結局は律義な妻に納められ

口数の少ない男になって老い

ほとぼりを心得ているねだりよう

満点でなくて魅力の人間味

大阪市 山川 阿茶

反省が自嘲に変わる淋しさよ

ただ一つおだて上手な特技もち

日本鬻結うてしまつてシャツ脱げず

冬ごもり墨絵のように老夫婦

汽車と云う人質とつてストをする

大阪市 阪上 十止庵

ぬくめしが食えても佗しい妻の留守

封書また書かずもがなのことに触れ

男とはやっぱり甘い差し向い

甘言の嘘を知らずに塗っている

妻の座にいつかL寸着て坐る

東京都 山根 白星

緞帳がおり現実の顔見合う

シェーカーを振りさんざんな親不孝

冬ざれの貌ポリーナスを受けてより

腑におちぬことアイロンの手の思案

捨て印に似た予備役で社に飼われ

島根県 堀江 芳子

ほどのよい酒に酩はころがされ

腹立てた佗しさばかり子の背中

ていねいに入歯磨いて朝の意気

敵しさが欲しくて亡父を想うとき

願かける子安神社の石段よ

西宮市 島居 百酒

小男のこれだけ伸びたい影法師

重文も銭の評価で鑑賞し

ご予算に合して手抜きした工事  
故里の壁俺のいたずらまだ残り  
俺に似た噂を他人の貌で聞き

松山市 谷 のぶお

山宿の布団の重さだけおぼえ  
ホッチキスで止めてあるのも癪な日よ  
集金へはいはいと呉れよい天気  
あんたには無理とやる気へ無情なり  
榮転も左遷もなく枯れすすき

八尾市 高橋 夕花

雨の午後独りのペンがよく喋る  
憂きことも生きる証しか冬の虹  
煩惱よ枯葉は落ちてゆくばかり  
ころがった毬のむこうに母がいた  
十二月哀しい女も走りだす

諫早市 原 田 明 春

ネオン街妻に済まない曲り道  
合鍵をもたせば亭主の午前様  
薄給の夢一枚の宝くじ

2DK仏に済まぬ足を向け  
合鍵まで持って去んでる倦怠期

和歌山市 若 宮 武 雄

わが影に失望してる蟹でいる  
頬笑みはやはり鏡も好きらしい  
この頑固とると老骨崩れさう

おおらかな愛水臭いかも知れぬ  
一片の土器へ古代の影往きき

富田林市 板尾 岳 人

滝の水金剛山の音がする  
竜に似て真すぐ登る山男  
金剛の雪で勲章作ろうか  
山男素肌に雪を積んでいる  
誰れよりも美しきものに樹氷あり

高槻市 若 柳 潮 花

雅楽舞い糺の森も冬の色  
染めの沁みかくす金糸の刺繡針  
執念に忘却のないさみしさよ  
失業の上へ物価がのしかかり

岡山市 直原 七面 山

だからと言って死ねとも言えず  
さようならよの後で夕立  
君と死のうか海は蒼色  
骨壺の中でやれやれ

藤井寺市 児島 与 呂 志

掌の中の母の温くみにある不安  
母の老いじわるも混ぜ甘えてる  
ぽっかりと時間があいた枯れ落葉  
しあわせの朝末っ娘と妻の声

耳掻き一つ気に入ったのが見つかって  
豊中市 戸 田 古 方

二つええことおまっかいと哄うてみる  
プラタナス枯葉の曲となつて散る  
ごたいそうな貴方シェーピングやと哄われて

名古屋市 吉田水車

仁王さん怒つたまんま五百年

去るときに慌てまいとて歎異鈔

臨時休業うさん臭さそな眼で見られ

やりとりを嘔う女にゆとりあり

神戸市 小浜牧人

真実の怖しさを知つた裏話

手鏡をのぞく女に隙がある

街角で夫婦のコント世智辛い

やがて春リレーのバトン重そうな

大阪市 金井文秋

孤独の日酔えば電話をかけたくて

染めるのがあほらしなるも齢やろか

迷い猫こも邪慳な人と知り

ヒロインにならねば不満顔に出る

八尾市 香川酔々

湖に雪が融けると蒼くなり

のら猫の逃げぬ尼僧の歩の運び

雪積んで明るく笑うこけしの瞳

待ちぼうけ時計に雪は降りかかる

西宮市 若林草右

十二月走るすべなしストつづき

言葉のあやと陛下いみじく逃げ給う

大声で陛下と笑うみ民われ

老人席ことさらよける気の弱さ

和歌山市 野村太茂津

真夜中の遺句集が呼ぶ枕許

八ツ当りしても木枯し春を待ち

反省を促がす心の隙間風

大切にしたい出遇いの旅情緒

島根県 藤井明朗

枯枝の生けるが如く花ばさみ

ゆるやかな景気怪しく視界ゼロ

雑踏を抜けて財布に聞いて見る

新築へ六十からの人生譜

松江市 吉岡遙児

東京行

いま何処の駅か訛りの人々ら

その裡に目も閉じ口も効かぬ連れ

二重橋感懐湧かず雨に佇ち

寝台車かすかな放屁とはなりぬ

松江市 小林孤呂二

酔うほどに年の始めを弁える

天も地も人も元旦静かなり

ぼく母似ぼくも母似と無視される

ケースバイケース役人うまく使うなり

松江市 柳楽鶴丸

忠犬ハチ公のような下請企業

男の純情解って下さい女房殿

ココホレワンワン掘れば出て来る公害

馬鹿野郎ともう怒鳴られぬ弔辞読む

松江市 恒松 町紅

毛糸玉妻にフトある少女趣味

共稼ぎ妻に外食誘われる

孫馬鹿で好かれていてもママが良し

ままならぬ天気月曜みぞれ降る

松江市 中川 晃男

とは云うも肩がこります眼はくもる

女手で育てて指をさされまい

女には女の意地が背を向ける

ふり向いた心にグサと冬の月

大阪市 河野 君子

ばら色ではないが俵せの枠にいる

温室で豊かにしぼんでゆく夫婦

家族とはなに湯呑二つの寂しさよ

あきらめからやっと脱け出て除夜の鐘

富田林市 岩田 美代

猫柳私に刺戟のない焦り

思索中の箒目逃げる木の実追う

冬の陽に過保護の犬にリボンです

逝く年へ言づけしたい語を探す

大阪市 宮尾 あいき

枯すすき歌う二人に花が咲き

我が城の品位を保つ靴そろえ

肩すぼめて歩けば影も淋しげに

友情におぼれて過保護になりそうで

島根県 小砂 白汀

質上げに売れぬ企業の立ちくらみ

段違い棒おんな曲げたり展げたり

温もりよ何故に足元から逃げる

義母逝く

点滴の嘘を見抜いていた微笑

神戸市 中村 ゆきを

爪染めて子供ある身を忘れかけ

革命を夢みる二月の青空へ

エリートで忠犬でよく喋り

まっすぐに歩いて小さな欲を蹴る

大阪市 有信 新之助

ズレているから父の顔になっている

人妻のせて髪を盗む

また一つところを売った便利さよ

入れ歯の高値が夜も磨かせる

大田市 藤田 軒太楼

視界ゼロああ列島冬枯れる

なにもかも自動化旅情味気なし

気真面目な隣の亭主と比較され

老醜をかかず似合う色がない

竹原市 小島 蘭 幸

少しペース落して今日を充実す

お正月闘志が逃げてしまいそう

勲章も妻に頭が上がらない

九回裏にならんと男燃えてこず

竹原市 森 井 善 居

いい事が続き人間気を許し

幹事それから飲み屋につけが効き

共稼ぎだから何とか十二月

帯の結び目に昭和の隙が見え

岡山県 竹 内 翁 童

七人の敵に失意を叱られる

三十年の勤続二行で足る履歴

美辞麗句並べて定年送られる

肩書きを取ればあっさり無視をされ

美祿市 安 平 次 弘 道

善人の嘘を通さぬ喉仏

不倫ではないがまぶしいホテルの灯

ディスクカバージャパンストのポスターがない

狙ってるスリを狙っている刑事

倉敷市 藤 井 春 日

耕運機村一番の牛を売り

不幸しか与えられない恋だった

霜枯れの菊に吾身を振り返り

清純を誤解されてる夜の化粧

呉 市 槇 田 英 詩

芦そよとなびいて風をみつけたり

児の夢に母の笑顔のある安堵

こぼれ餌を拾う雀の愛想鳴き

競走馬に生れてわきみ知らぬまま

米子市 八 木 千 代

集まって仲間のよさを吸うて来る

凡々の春を重ねる掌を合せ

一期一会別れがこわい齡となり

ひとりだけ着いたゴールのむなしくて

倉敷市 小 幡 里 風

デコボコの道だったと振り向く妻と

反抗期ある日鸚鵡の啞となる

埋れ火へ触れる恐さと嬉びと

久し振り逢うてはならぬカーブミラー

枚方市 宮 川 珠 笑

猫沈思今夜は誰の床で寝よ

釘伸ばす日曜大工へ暮れ急ぐ

みかんの香残る手で書く旅便り

脱穀機止めて競馬のゴール聞く

松原市 玉 置 重 人

何をする人ぞラッシュの波の中

這い上り這い上り男の歴史かも

波滞の中に師走の排気ガス

ひっそりと病む老犬の瞳が痛い

大阪市 中川 滋 雀

こんな柄似合わぬ形見の歳になり  
またもとの二人になって子を案じ

転結にならぬ起承の幕が下り

投げやりは出来ずけじめもよう付けず

高槻市 福田 丁 路

特別の拝観料がある秘仏

晝に祈って下手な写経する

道化師となって余生を楽しまん

見さかいなしの頑固一徹

愛媛県 渡 辺 暁 童

双生児というを 誇る当世

自己尊大の 珍な遠吠え

言うて及ばず 晩酌で寝る

たまむし色に ひそむ怨念

大阪市 西 出 一 栄

丹精の菊へ友呼び秋を酌み

健康がダイヤに勝る珠と知る

散歩にも喜寿の夫に付添われ

なくさみと思うた趣味の底知れず

岡山市 出 原 敬 一

同じ位置でだれかの縫っている影絵

助言者の思想わたしを白けさせ

渡り鳥雪の分校友が増え

売り手にはまだこれからの冬である

堺市 高橋 千万子

寒行の夜なきうどんに眼もくれず  
つらあてになるから変わってもやれず

せっかくのチャンスに今日は連れがあり  
たわむれにもれた言葉と思いたし

島根県 大 森 孝 華

美しく老いたい趣味をまたふやし  
衣着て女どうしの距離を置き

手かげんのねじへポンコツ廻り出し  
孫去ねば去んだですき間風が抜け

島根県 錦 織 文 子

塔一つ抱いて紅葉の燃えており

女でも裸婦に魅かれるカレンダー

蜜柑食べたべ女の黙秘権

くつろいだ客で利害のない温くみ

倉敷市 稲 田 豊 作

譲りたい家業の汗を子が嫌い

盗られては大変賽銭箱に鍵

尼笑い抜け毛の苦労知りませぬ

落選の今日はあの人只の人

水見市 関 美 子

つり皮を下さい浮上したい新春

小っぱけな余憤岩間の忘れ汐

花ならば赤くありたいああ女

受話器からさめた声聞く酒場にて

京都市 松川 杜 的

倅せか知らぬが話題のない夫婦  
ギリギリをしゃべってピン子悪びれず  
還曆へイメージチェンジの肚を決め  
一日一歩昇竜なんかに逆らわず

東大阪市 竹 中 肖 二

熱れ柿の一つに竿が届かない  
献金をせよと財閥太らせる  
風潮にただ流される無定見  
街路樹の下だけ都心の土がある

東大阪市 竹 中 綾 女

嫁の荷のトラックに逢う秋日和  
成長のしるしと壁の傷許す  
喪の家を辞す潮時をつかみかね  
眼鏡二ついりあっち掛けこっち掛け

鳥取市 両 川 洋 々

金の要る話を下積み寒く聞き  
ポーナスは無いが打ち込む職を持ち  
櫛の目も正しく女まだ老いず  
納棺の亡母へ別れの櫛を当て

今治市 越 智 一 水

旅に出てその性格をつかまれる  
古傷のその一つだけふれず嫁き  
のんのと降る雪墓はただねむり  
木枯の吹く夜昔は民話聞け

大阪市 神 田 秀 峰

気を付けや送った方がけつまずき  
クーラーを付けたら冷え症またばやき  
お菓の宣伝に出てなる病気  
這えば立て立てばあんまり伸び過ぎた

大阪市 黒 田 真 砂

別の目で夫を見つめて居る私  
身構えても女に残る何もない  
留守居の夜コーヒ苦く尚苦く  
瞬間をうそで固めた女の目

和歌山市 垂 井 千 寿 子

売り出しピラ師走の風に舞うポーズ  
常識も次第に骨董めいて来る  
思い出のある一点が消したくて  
乱れ籠一人淋しい夜を包む

玉野市 小 谷 仙 山

絶対を付けて来たのに断わられ  
其れだけの事でと他人目で笑い  
三カ日言いたい事を酒にする  
でる抗のカケヤで打てば手が痺びれ

宿毛市 山 本 窓 花

ストもなく日々行商の黙々と  
口げんかしても半日持たぬスト  
ハンガーが夫のよるめき知っている  
子の事になれば道理もひっこめて

和泉市 西岡 洛 醉

流行を追いかけ女の性は生き  
友情のかげら小さな肩を貸し  
静かなる余生飛鳥に住むときめ  
走ってもちゃんと歩幅に妻が居る

東大阪市 落合 思 月

忘れっぽい妻を笑って見たものの  
相続税の心配かけぬコップ酒  
生甲斐と云う軒下の植木鉢  
ほほ笑みをたやさぬ嫁が居てたのし

鳥取県 鈴木村 諷 子

雨の降る方へ駆けてくことになり  
飼犬の方にれっきと血統書  
来世は妻よ農夫に嫁すでない  
いつとなくあるじの性が牛に似る

大阪市 藤田 頂 留 子

売り声をテープで流してしじみ売り  
しあわせなSL定年惜しまれて  
景品へもしやと財布のゆるむ紐  
インフレへ討入りたい浪人衆ふえる

生駒市 草 深 醉 升

一年の穀を脱げよと除夜の鐘  
細々と生きても心に持つゆとり  
陽あたりを歩けば我が影伸びて逃げ  
くるみ割る鴉の知恵も生きるため

守口市 野呂 右 近

白鳩が居て黒鳩が居ぬ救い  
下向いて暮す二人でつまずかず  
恋の字を書かなくなって老二人  
金銀を従えた歩の強い事

大阪市 津 守 柳 信

女だから心の虹をあたためる  
トンネルの中間に居て忘年会  
聞き流すつもりへ追い打ちかけてくる  
こわい竜やさしいたつも住むまこと

大阪市 室 谷 徹 舟

五十八生命預ける初入院  
看護婦の夜勤デートもしたかるに  
絶食と検査で病院寝て居れず  
入院で心を治すこと悟り

鳥取県 森 田 布 堂

環境庁叩けばこも出るホコリ  
信心の灯の仏壇で火事を出し  
飼い豚に正月という餌もまじり  
助手に助手ついて手術のメスの音

大和郡山市 森 田 カズ エ

自己診断氣拙い医者目の目であ  
モナリザに似たあの女のレントゲン  
宮詣り孫神前の大あくび  
墓地買いに母はやっぱり故郷へゆき

大阪府 本間満津子

嘘書けず本当も云えぬごぶさたです

白杖のとどかぬところで世が変り

年の瀬をこたつの客は気にしてず

ほどほどに部屋ちらかつてる気の安さ

和歌山市 内芝としよ

にこにこ心に宝石持つ娘

とぼけてる積りが素顔と受取られ

一代で果てる花故赤く咲き

一円を集めて小さな徳を積み

鳥取県 清水一保

母掃けば木枯し挑戦して落葉

母ちゃんは矢張り母です婦人年

忘年会だから公認証が下り

松江市 岡崎祥月

おとなしい兎あばれて年は暮れ

天理教神の言うまま思のまま

健康と別にしお時考える

竹原市 時広一路

ある決意舗装してない道を行く

後から見れば両手で支えられ

自画像はいつも若若しく画かれ

福原市 岩井本蔭棒

ピラ配りピラの中味を理解せず

荒壁が乾いたまんま金詰り

正直で貧乏神に惚れられる

笠岡市 松本忠三

郵便のスト締切りへ気をもませ

アルバイトですとサンタがペタル踏み

席確保して食券を買いに行き

伊丹市 小川静観堂

あの辺のホテルだったわねえと熱海の灯

台所女の嫉妬の古戦場

生命より愛すと遂に言うたことなし

倉敷市 能登原白水

吹き溜り雪の従順さを悟り

山の疵無心の雪に埋められる

母と子の二段二拍に年が明け

平田市 久家代仕男

孫の手にしばらく逢えぬボチ袋

荒れた手に幸を掴んでいる笑顔

OB会もと肩書の順に座し

守口市 村田瓢太

吞舟の魚法網巧みにくぐり抜け

人権尊重叫ぶ一方ではすぐ殺し

五百十八段昇り降りせにゃ社に着けず

西宮市 藤村メ女

云い負けた手からお皿が一つ割れ

父の座に父なく座敷広う見え

伴せが今年へ続く新春の旅

大阪市 西川 誓二

有難い文化三度の熱い飯

冬の陽ざしは日一日と春を告げ

蟬蛙耳が昔の音で鳴り

何度も何度も政府様の二枚舌

孫に来てほしいお菓子は絶やさない

玉手箱のように煙けむりとなった宝くじ

貝塚市 行天 千代

岡山市 川端 柳子

ふところの寒さ木枯しよりこたえ

枯葉舞う彩の美しあわれとも

病葉といっしょに恋も散ってゆき

持つべきは子供とおもうそうおもし

お見合と知らぬがままの高笑い

即答を避けたブランコゆれるのみ

東大阪市 斎藤 三十四

宇部市 平田 実男

スッポンの特効信じる日の淋し

寶石へ女弱さをさらけ出し

酒が出てから胸襟ひらきあい

洗濯機下着もマスクも布と見る

酔うた時だけまともなことをいう

胃の愚痴が聞こえて来そうな松の内

神戸市 仲 どんたく

愛媛県 村上 旭童

ウーマンリブダンスの時はリードされ

帰る気になりかけた頃ストライキ

パンのへた捨ててひ弱わな子に育て

出稼ぎの目にぜいたくなストライキ

あての無い出勤今日も営業課

日向ぼこ百まで生きる欲もなし

和歌山市 津田 与史

仙台市 川村 映輝

世情騒然風吹くままにゆれる葦

両親を乗せればハンドル重くなり

嫁だから遠慮いらぬとそれは嘘

わが事となれば新聞嘘半分

遺句集で葬水は僕を叱咤する

高槻市 山田 季賛

大阪市 河井 庸佑

ペランダで菊造りする幸が有り

実力は有るが不思議に伸びてこず

秋はよし富士の夕焼け見直され

両親の夢とは違う方へ伸び

無造作に結論決めて叱かられる

実力の世界人間の本性見せ

小松市 馬場 魚山

鯛はもう祝辞の紋切型に飽き

出雲市 原 独仙

真実も嘘も素直にボールペン  
五十年連れ添いなおも愚痴りつつ

今治市 小笠原有里

札所みな紅葉でかざる南無大師  
元旦の酔いは王侯の酒に似る

父母選ぶ自由なくして子と生まれ

和歌山市 吉野富江

働ける幸休日の中に溶け

常識無いことづけ聞いている常識

気の向かぬ視線へ返えず作り笑み

呉市 林野甦光

じみな柄選る娘へ育ちなど言わず

ぬいぐるみ温い童話のつめてあり

さりげない顔年金を取りに行く

大阪市 天正千梢

孫の膳ふえてことしを屠蘇の味

弱さにぶつかって謙虚さ深くなり

精一っぱい生きたきず口大事がり

和歌山市 沢山福水

限界を悟り心に灯を点し

長生きの見本のように長く生き

点滴へ今日のいのちが延びて行く

兵庫県 大江秋月

妻と子が居て孫も居て笑い声  
散髪をしても見ばえのせぬ男  
みんな寝てからの夫婦に金のこと

兵庫県 河原みのる

沖繩追憶紀行

その昔還らぬ若鷺翔し海

天国の誰にも逢わず雲の峰

降り立てば季節のずれや夏帽子

今治市 原田一風

熱っぽい瞳が近過ぎて唾を呑み

審議会審議飛び越し答弁し

捨てたがる妻と勿体ない亭主

唐津市 新岡回天子

空想の竜雲でこの辺かくしとき

豪快な踊り蛇そのものに迫りくる

空風を受けて竹林元気なり

大阪市 柳原静香

落ち葉踏む故郷の便りふところに

父の振るタクトに迫力欠けている

ゴキブリも新幹線の旅としやれ

奈良市 宮口笛生

駅からを話の歩巾の連れが出来

生きるにも死ぬにも世の中高うつき

もう冬が来ている風邪をひいている

大阪市 江城修史

ボケットに小銭不況の音で鳴る

別れの譜囀咽ころした小糠雨

組立てる嘘に疲れた男です

鳥取市 大塚豊生

孝行の尽くせぬままに忌中札

冬仕度亡父のとおりにして囲い

初あられ布団の重さ一つ増し

米子市 増田竹馬

休養に休養がいる二日制

救急車まだ覚えられぬ〇と九

ローカル駅待つ間欠伸をうつされる

滋賀県 溝口はやを

墓穴にはあらず苗木の穴をほる

ジーパンがお茶漬はこぶ京の店

ストをして権利のめしを三度食う

鳥取県 林露杖

現し世の苦楽解脱の顔静か

六十の手習いちちろに筆を描く

八日間こんにやく問答くり返し

神戸市 佐々木静泉

たしかなあしたになりそう一家団らん

中ピ連わたしのポーンヌもらってよ  
健忘症どうでもよい時思い出し

大東市 土岐トク子

年一度分不相応に買うも意地

哀愁の兵士奏でるトランペット

トランペット余韻のこしてザツエンド

京都市 山本祇風

公園のベンチに逃げて鳩といる

云い訳のメモ選っている十二月

漬け方を教えて嫁へほめる味

大阪市 神夏磯道子

中座した人の噂を一しきり

傾いた稲穂は米価など知らず

悔いのない積木の年であってほし

川村好郎

不死鳥のつもり手を挙げそれつきり

久々に逢いもう使えない言葉

うしろ横向く首はなしひき蛙

古木にも新芽逡巡ゆるさな

そんなこと忘れてしまえと除夜の鐘

西尾 栞

元旦の山川草木神代めき

元旦の書齋にあれば孤高めき

ケーブルの視界広がる初詣  
初日の出拜んで入日拝まない  
会長のうちまい冗談招ばれ酒

菊沢小松園

天井の低さまで親のせいにする  
寶石の冷たさに触れる令夫人  
バラの棘刺さない時がいとおしく  
月見草月に向けないことになり  
悩みある人とは見えず舞い納め

若本多久志

ジャアネエと別れてヤングふり向かず  
老い果てて人と争う愚を悟り  
寂というこよなき境地古寺巡礼  
性格の通りみかんの筋を取り  
正直者がビッグニュースになる世相

尼 緑之助

過疎のバスゆっくり乗ってゆっくり降りる  
どう慰めて見てもわびしい養老院  
問答は無用国会もゴネるのみ  
年の瀬にかかわりはなしのど自慢

本年四月号からの雑詠選者

同人吟 若本多久志

水煙抄 川村好郎

愛染帖 正本水客

社 告

野放しの公害スト権スト走る

浜田久米雄

元旦のところでことしを歩かんか  
気取っては見たが肩書なにもなし  
夜なべした母満願のしつけ糸

免許証更新まだまだお若い気  
いつか行く無何有の郷の春霞

信念の道はひとすじ直すぐい  
小休止茶柱の立つ味を賞で

年輪の一本謎めく渦を巻く  
二刀流だとは仲人伏せている

顔三つ旅の話題に事欠かず

スト権スト

握りしめたままの拳でスト終る  
国民不在とも言われ長かった八日間

働ける喜びストの線路が錆る  
整然と立上る誇りを誇りとも

地下水がやっとな陽の当る水になる

昭和52年度以後の水煙抄選者に

正本水客

右のように決定しました。

川柳塔社

正本水客

川柳塔社



室山三柳

俳風柳多留廿五篇研究

— (九丁) —

清 博美・西原 亮・八木 敬一  
鈴木 黄・紀 内 恒 久・室山 三 柳  
青木 迷 朗・入 江 勇・岡田 甫

152 江戸中に鰯をく<sup>？</sup>(しよつ)と、鮓をうり

清―読みがはっきりしないためもあるが、よくわからない句。花咲一男氏編の『江戸鮓売り』では、どのように説明されているであろうか。小生、この本未入手のためどなたかお調べ願います。

西原―朝鮮鮓売のすがたでもあろうか。「鰯」というからには、叔父に当るわけで、背負うところの鰯は、両親がないことになる。あわれさを強調したのもあろう。

岡田―句の読みがハッキリしないので難句。

153 大いせ屋古せを二本百に付ケ

清―「伊勢屋」とは、江戸に店を持つ伊勢出身の者が、極めて始末屋であったことから、けちんぼうな人物をさして「伊勢屋」というようになったもの。本句の場合は、その上に大の字がつくから、そうとうなけちんぼうであ

あろう。その大けちんぼうが、古背二本に対して、二百文の値をつけたという句。「古背」とは、鰯が盛りを過ぎて、秋の季に入ったもの。初鰯と対照的である。「初鰯は高価なりしが、秋の古背に至りては、肥大なるも価二百孔に過ぎず」(『蜘蛛の糸巻』)。

八木―賛。  
伊勢屋の生酔酒だか鰯だか  
西原―賛。「二本で百文」であらう。  
二百度も値ぎり鰯を伊勢や買  
字余りの鰯ハ伊勢や喰ぬ也  
室山―礎稿プラス西原説賛。  
入江―同。

二八・9  
二七・2  
二七・23  
一七・44

伊勢屋さんもう食へるよと鰯売

岡田―同。

154 道具の大きいをくらべるあやつり

清―例年十二月十三日は、新春を迎えるための準備として、煤掃きが行なわれる。本句もその煤掃きを詠んだ句。ちょっと読みにくい

155 身がるに出たちこみかいたしやせう

清―例年十二月十三日は、新春を迎えるための準備として、煤掃きが行なわれる。本句もその煤掃きを詠んだ句。ちょっと読みにくい

が「身軽に出て立ち塵芥がいたしやせう」である。手軽な服装で出て来て、ごみのかたづけぐらいはしましようといっているのだらう。

青木一賛。「ごみが致しやせう」は、「ごみがするぞ、どいた〜」の「ごみがする」をやや丁寧に「ごみが致しやせう」と言つたので、御出入先のお店の大掃除（煤掃き）の手伝いに来た職人であらう。

空山一賛。厄はらいあたりの口調の真似ともされる。手伝いの職人でなくともよいと思ふ。丁稚あたりか。

岡田一近所への常套的な挨拶文句。中には都合で十三日に煤払いをしない家もあるため。

156 近くの他人湯をわかし腰をたき

清一「遠くの親戚より近くの他人」という諺がある。出産間際の妊婦、あいにくことに亭主が留守中に、にわかにな産気づき、あわてた近所の人が、産婆を呼びに行ったり、湯をわかしたり、腰をだいたりして面倒をみる。

八木一賛。

氣のよわい亭主理づめで腰をたき

西原一賛。座産だから腰を抱く。

岡田一賛。

157 旅の留主まよけに里の母をよび

清一昔は旅に出れば、そう簡単には帰つて来られない。そこで留守中の女房に貞操の危機がおとずれる。この亭主、頭が良いのか、嫉

妬深いのか、その危機を未然にふせごうと、女房の母親をつれて来る。

八木一賛。「旅の留守内へもごまのはいがつき」（八・31）となるのを恐れるのだ。

紀内一賛。呼んだのは亭主である。

青木一賛。「魔除け」という表現が面白く、多分新妻で亭主はやさしく頭腦的な亭主。

空山一賛。呼んだのは嫁でもよいのでは。

岡田一賛。呼んだのは亭主でも嫁でも、或いは夫婦同意見の場合もありうる。

158 化ケそうな傘をしふ〜いせやかし

清一蕪村の句に、

化けさうな傘かす寺の時雨哉

というのがある。この文句取りで、けちんぼうがもう駄目になっているともいえそうな傘を、さもおしそうにしぶ〜と貸したという句。「伊勢屋」とは、伊勢出身者の店が、儉約なことでも知られ、転じて始末屋、儉約家という語になった。

ばけそうなのでもよしかと傘を貸し

五・15

入江一賛。享保の頃、京阪では「洪蛇の目」の傘がはやった。柿の洪とベニガヲを混合したものを外周と中に塗り、その間に白地を残した。「塗笠」などは表面を油・漆それに洪で加工したものだ。伊勢屋の使う粗製の番傘などは洪を塗ったものが多かったのだらう。「しふ〜」には、この「洪」が掛つてある。なお、江戸では古傘買いがいて、生業として成り立っていた。金になるものを人手に

渡すのが最悪の事態も予想されて、気がすまないのである。「でんぐり返しする傘を伊勢屋かし」（二六・24）。

岡田一同。

159 大坂の金逆桐か壱分出来

清一「逆桐」とは、金貨幣の表面に、五七の桐の紋章が極印されていたが、この紋章が上下逆に打たれたもの。数が少なく、またこれを持つていると福があるという迷信もあって、手に入れた人はなかなか遣わなかった。

といっても、本句の場合は、逆桐の貨幣を、いったものではなく、大阪方の片桐且元が、徳川方に通じたことをこう表現して詠んだもの。

空山一賛。「桐」を使った句。

岡田一同。

### 寒中お見舞い

川柳塔社 参事 一同  
川柳塔社 常任理事 一同  
川柳塔社 理事 一同  
川柳塔社 句会部 一同  
川柳塔社 編集部 一同

ぶろくらむ

A	川柳を語る	庄高	尾亮	し雄
B	長	井上	三太	花
C	こども舞臺	山田	高橋	江子
D	川柳の歴史	山田	高橋	江子

大正十二年二月菊判34頁で意欲満々スタートした「川柳雑誌」は、地元関西はもとより全国的な川柳関係者の間に、さまざまの反響と注目を浴びたことは、路郎自身が事あるごとくに記述している通りである。(前稿参照)

カットは当時の朝日会館のプログラム。表紙に「川柳のター川柳雑誌」創刊百号記念」とあつて卒100とある。「C」の中央に山根寿子の名がみえる「D」に「恋の良」の句。川柳座の役と名がある。

# 麻生路郎物語

— 躍進と試練の川雑 —

東野 大八

(14)

この川雑創刊号のへき頭四頁を飾った「誤れる川柳観を排す」という堂々の論旨が、いわば路郎がかねてから抱懐した「川柳社会化運動」の実践要綱を意味してもいい。

「川柳」というものは、決して世間が考えているような、つまらない謎かけのようなものでなく、俗悪でお座敷にのほせぬようなものではない。私達が川柳雑誌を発刊することになったのは、世間の人達に真実の川柳を知っていただきたいためにほかならない。

この路郎の川柳本願の素地には、当然、世間に親しまれ、愛されて売れる大衆川柳の夢が伏在していたことは当然である。経営の成り立つ発行部数を誇る広告の効く雑誌：それはもはや趣味一筋のいい加減な豆本式柳誌では話にならない、川雑発行の夢を路郎にかわって代弁すればこのように要約できよう。

「川柳雑誌」No.239(昭和十八年十二月号)の「雑誌奉還」号で、「苦斗四十年」と題する路郎の回顧録には、つぎのように記さ

れている。

私は川柳雑誌社の草創時代に三十年計画を発表した。ところが誇大妄想狂だと突つた連中もあつたが、第一期の川柳社会化運動も、十年目に東京で社の句会を開いて社会化完遂の声明をした。この時には大阪から多数の同人を引き連れて上京、東京で空前だといわれた各派網羅の大会を開催した。

第二期は量的発展並びに質的完成を目指したのであつたが、これまた、最早何人が継承しても継承し得るだけの社礎をきずき得たので、後継者を物色中たまたまた大東亜戦争の勃発、戦局の緊迫に鑑み本年末をもって、雑誌奉還の筆に出ることになつたのである。

第三期は私を自由な立場に於て川柳の研究に没頭させて貰いたいというのであつたが、雑誌を放れることの自由はここを得られたが困難に背を向けての自由さはない筈であるから、私自身の研究がこれからの十年間にどの

程度の進展をみせるかは疑問である。(中略)

話を再び前に戻すが、東京句会以前のことである。川柳の社会化運動を徹底せしめるために「川柳雑誌」の百号記念の大会を朝日会館で開催した。この催は俳人月斗を一驚させ物に動じない朝日新聞の計画部の人さえも唖らせたのであった。未だかつて短詩型文学で朝日会館の席を埋めたことがないからである。しかも講演と講演との間に音楽すら入れず三人ぶつつけに講演をやったことも会館はじまって以来のレコード破りだといわれた。しかも入場料一円で千人以上の人々を集めたのである。

この時にも面白いエピソードがある。第一は社会事業としての興行税を支払ったことであり、第二は入場料を一円、五十銭の二種類にして欲しいという一部同人の声を蹴とばして一円で押切ったことであった。第三は余興に

―恋の罵あゝの眼だらうか眼だらうか

を喜劇に脚色上演したことであった。俳優はアマチュアの各派のスターばかり引抜いてきて「川柳座」という名称としただけに、二度と見られぬ劇団であった。しかし、この劇は、その後、朝日会館と新町演舞場で上演されたそうである。その一つは犬養朴堂翁の追善会に興行されたいが、二回とも筆者は見ることが失った。つまり原作者に無断興行が行われた訳である。

その四は今は亡き東京の杵家弥七師が長唄

「新浦島」、その五が現在東宝で活躍している山根寿子嬢が我々仲間で、あー坊と呼ばれていた頃に新舞踊を踊ってくれたことである。楽屋にガン張って総指揮をふるっていた私が、タツタ一夜のこの大会のため、前後三十日間一滴の酒も口にできなかったことも特筆大書すべきものであったのである。

この大会以外、朝日新聞社会事業団後援の下に、同社三階大広間で、歴年同情週間宛金のための師走大会を挙行、常に三百余名の川柳人を集めて、川柳界のために大いに気を吐いたものであった。

その他三越八階における川柳大講演会では講演以外に照明を使用して川柳句会を実演した。おそらく句会の実演は、これをもって嚆矢(こうし)とするであらう。

「雪」「土団子」後の葉柳一の高踏短詩型の世界を経て、いかなれば川柳詩を大衆性への開放によってわが真実の「川柳」のジャンルを打ち樹てようとした路郎は、創生期の川柳雑誌を足がかりとして、戦前のある時期には時の社会環境の特殊ムードも幸いして彼が夢想する川柳社会化の成果は、ある程度実現化されたともいえよう。終生「川柳雑誌」にわが川柳人生を賭け、それに燃焼しつつして生涯を終った路郎―だが、その川柳人生はもとより平坦なものではなかったのである。

「川柳雑誌」は路郎三十七歳の発刊で、発行所は兵庫県武庫郡鳴尾村字寺の後四四。柳

の大樹を前栽に、裏庭は広い畑に恵まれ、遅日荘」と名づけたこの路郎居には、四季の草花や当季毎の野菜類が食膳を賑わせていた。壮年期の路郎は張り切っていた。路郎の代表的名句の一つとして挙げられている

―君見たまえ波蕩草が伸びている

は川雑第一巻十一月号を飾った一句で、初冬の陽ざしの土をおしわけた力強いみどりの結昌のよくなほうれし草の葉と根元の紅い色どり、朝日の陽ざしに若さそのものを象徴していた。健康で今日の自信と明日への期待を存分にはらんだ生命の、それは路郎の人生への賛歌でもあらうか。君見給え―その叫びは愛妻へか、わがころにか。

路郎篇大正傑作一万句(俳句) 四六版四百八十二頁藤谷崇文館刊がこの年に世に出ている。執筆者は花菱、東魚、久良伎、紋太、松郎、柳雨、省二、五呂八、美々作、路郎らで往時の柳界の一翼を担う人々だった。つづいて新撰傑作一万句集(俳句)も編集準備に入っていた。また、庶民俳句集のこうしした依頼編集ものほか、「川柳ふところ手」柴舟画、四六版二百頁田村書店出版の改訂版も世に出ている。

「大分以前のことである。ある古書展で路郎著「川柳漫談」を手に入れた。昭和四年八月一日刊。大阪の弘文社発行の菊版本で四百頁。定価一円五十銭とあり「路郎」の奥付もある。この本の序文はつぎの通りであった。

「私の半生は川柳の生活であった。私は私の好きな川柳がいつまでもいわれなく、社会

から誤解され、文壇では下積にされているのを概し、ここ六年間はその繩縛から解放されることと、ひろく社会に川柳を浸潤せしめてほんとの川柳がどんなものであるかを知って貰うため、川柳の社会化運動に没頭してきていた。そのためには雑誌「川柳雑誌」の刊行を続け、機会を捉えては東西南北に足を運んで、体験が生む力強い川柳に就いて説いた。近頃はまだまだ遠い。たゆまずその道に精通したいと思っている。この小著がその運動の一助ともなれば幸いである」

とある。読んでみて面白いのは「川柳染ちがい」鳥平画と「昔前の大坂見物」柴舟画でした。いつか先生に自分の本は全部お持ちですかとおききしたら、いやなかなか、持てないんだよ、と答えられたことがある」

（本多明志實簡）

川雑が創刊された時点で、大阪の柳界は先行の「番傘」と、川雑発刊に刺戟されてか、二月遅れて「大大阪」（本田源花坊主幹・大阪市北区老松町三・大大阪川柳社発行・菊半載六十頁）が出た。川雑第二号にその一頁広告が出ていた。

「由来、浪花の地は平民文学の発祥地であり享楽地である。拙斎や山陽のような学者が大幅帳を繰り、算盤玉を弾いていた時代もあった。西鶴にしても巢林子の戯曲にしる不朽のものとなっている。私等は大正聖代の佳吟を後世に伝うべき尊き使命の下に生れたのである」

「淡花坊は、さきに「絵日傘」を単独発刊し

たこともある路郎の川柳仲間であり、友好吟社でもある。いわば大阪の久良伎流の風流人で新人獲得に乗り出したもの。こうして大阪は「番傘」「川柳雑誌」「大大阪」の三誌でい立期がしばらくつづくことになる。

こうした大坂柳界のムードを反映したのかどうか。川雑発刊に程なく一つの試練が路郎を見舞った。川柳以交助力の柳誌「みをつくし」を刊行し、路郎に助力を依頼してきた。いわば川雑発刊のきっかけを作った吉川聖人、竹田芦穂らの同人辞退であった。創刊年余もまた各支部を形成していた聖人一派の大量脱退はよくよくの理由によるものと思われるが、詳しい内容はわからない。

創刊間もなく聖人氏などの脱退で非力になった「川柳雑誌」を応援すべく、翌十三年塚崎松郎、井上刀三、林田馬行の「灰」同人三人が、「灰」を廃刊して川雑に馳せ参じ同人に加った。この加盟は河野春三の推薦である。春三は明治三十五年堺市に生れた。大正十二年に路郎選の日日柳壇（大阪日日新聞）水府選の「今日柳壇」（大阪今日新聞）の投句から川柳への接触がはじまり、水府選の特選が奇縁で「番傘」の投句の常連となり、水府の世話で堺市の福助足袋株式会社に入社し同社広告部（大阪市）の岸本広告課長の下で文案係にもなった。時に彼二十三歳。春三は大正十五年堺川柳会を結成。「番傘」編集に携ったが、翌年ごろから日車・半文銭・路郎の作品に共鳴。川柳の革新をめざし「番傘」を脱会、路郎に私淑する形となる。

松郎・馬行・刀三の川雑加盟も、春三の働きかけであったことは明らかだ。（彼自身の参加遠慮は、対「番傘」の気兼ねからか）もつともこの三人は、川雑同人正味三年のち脱退して、黒木鶴足（もと「みをつくし」派で英豆を改号）に春三の五人で「川柳使命会」（松郎命名）を結成、革新川柳運動の実践活動に入るのである。

「人は彼（路郎のこと）筆者註」を狷介で人を容れない頑固で偏狭な性格の持主であるという。それゆえ有為の青年が彼に近づいても、すぐ反撥して背いてゆくことを繰り返しているという。そういえば塚崎松郎、井上刀三、林田馬行、黒木鶴足、松丘町二、若井たけし、川合舟々、岩本素人、松盛琴久、水谷鮎美ら優秀な作家たちも路郎の「川柳雑誌」にはいつて日常をともにすると、すぐまた路郎を離れていくという事実は事実として否定できない。

しかし、まことに片意地でいい出したら損得を考えずに、青筋を立てる彼ではあるが、心の底は常に孤独であり、常に友情に飢えていた人間であったとボクには思える」（川柳平安二百号記念特号号・麻生路郎作品・時性と大衆性の中で「河野春三」）

しかし、こうした川柳雑誌創生期の人材異動の中に、ただ一人の異材がいた。「みをつくし」派の一人である橋本二柳子（川雑第一支部長）である。この人物こそ、創生期の川雑をほぼ中期までの川雑の土台骨をささえ、路郎のかけがえのないアシスタントとして活躍した二柳子改め橋本緑雨その人である。

弔

辞

中島生々庵

路郎先生三周年忌句会「引越し」遺の春巢氏。(光明寺において)



謹んで 川柳塔社副主幹 北川春巢先生の  
ご霊前に川柳塔社一同を代表してお別れの言  
葉を申し上げます。実を申し上げますと、私共と致  
しましては長いおつきあいでもあり、どこ  
からどう申上げていいか、途方に暮れて終っ  
ているというのが私達のほんとうの心持ちで  
はないでしょうか。

丁度満一か年前、即ち昭和四十九年十二  
月十日付で発刊された先生の句集「聴診器」、  
先生が長年念願を持っていらしたご愛着のこ  
の句集が生れてから一か年後の十二月二十七  
日という日にご長逝なさいました事は、何と  
なく、目に見えぬ因縁の糸のようなものを感  
じるのであります。この句集刊行については、  
本上のご注文なりご希望なり校正なりは、極  
く一部の本社編集部に託されて、一般の人  
には秘ししながら入院手術をうけられたのは  
昨年十月のことであり、小康を得て居られ  
たのが本年八月十五日再入院、その後四か  
月、ついにお元氣になれぬまま今日に到った

のであります。その間、何事もすべてお見通  
しのご心底も知らず、句集刊行記念の催しの  
事はかりご相談申上げて居た私共の無智は何  
としても申訳けなく辱しく、且医人として、  
ご立派なご心境、ご態度は決して凡人のなし  
得るところではなく、今更の如く心打たれる  
ところでありませう。

先生と川柳との出会いは、先生がまだ大阪  
大学医学部在学中からの事で、昭和十二年ご  
卒業、第二内科医局当時は阪大川柳会に籍を  
おかれ、大阪鉄道病院へご就任後は大鉄柳川  
柳会へ、大阪市交通局病院時代は「川柳大  
阪」のために自ら会長となり、又お住いの関  
係から「城北明朗会」のご指導を続けられて  
満十二年等々、ご勤務の職域、お住いの地  
区、先生のあらせられるところ、必ずといっ  
ていい程、先生を中心とした川柳グループあ  
りと言った次第でありました。

それにもまして、麻生路郎先生主宰の「川  
柳雑誌」社では、昭和十三年から川柳不朽洞  
会員となられ、三十一年来、その理事長とな  
り、四十年路郎先生ご逝去の際は、理事長と  
して万般の重責を果たされて、当時の不朽洞  
会員一同が深く感銘申上げたところでありま  
す。降って昭和四十年「川柳塔」社発足に当  
っては参事の要職をお受け持ち塔に大きく、その  
運営、企画に寄与される事極めて大きく、昭  
和四十年来副主幹の重責にあつて今日に到っ  
て居るのであります。

以上のこと、すべて先生の教養やご熱情  
がもたらした事は勿論であります、それ以

前の問題として、何人もまねの出来ない人間としてのお人柄、ご仁徳というものに起因すると、私は固く信じて居る一人であります。

ご自分の句集発刊に就いては、並々ならぬ念願を持ちながら、なかなか踏み切れなかつた理由として、句集の自序に

「われながら完全辭に腹が立ち」

という句を示して居られます通り、科学者としての律義さ実直さに腹が立つ程、余りにもご身辺がご多忙であった事が、ひいては健康をそこなわれた近因ともなつたのではないかと恐察申上げ、今日先生を失つた悲しみの中にも、とりかえしのつかぬ愚痴が湧いて來るのです。「川柳塔」社と致しましては、これからの先生の限りない熱情とご活躍にご期待申上げ、先生のお人柄を中心に、益々親和のつながりを強固にしてゆきたいと、念願して居りました折柄の事、今日このような悲しみに遭遇いたしました事は、大きな大きな支えを突然奪われた次第で、ほんとに痛恨の極みであります。

しかし、何時までも涙に打ちひしがれてばかり居る事は、先生の生涯を通じての柳理に對しても、又先生との長い間のご厚誼に對しても決してお報いする道ではないと気付かせて頂き、私達一同心持ちを立てなおして、精進努力してゆきたいと誓いあつて居ります。どうぞ今迄とらうのご親情で今後ともお導き下さいますようお願いしてお別れの言葉と致します。

春果さん さようなら。

昭和五十年十二月二十九日

川柳塔社主幹 中島生々庵

憶々

## 顕照院积宝医居士

西尾 栞

曩に、阪大川柳会の同窓生、井上湧三氏の御霊をお送りし、今と同じく、クラスメートの、北川春果氏の告別式に参列することは、洵に痛恨の極みであります。何時か一度、同窓会を開催しようと話したことがありましたが、遂に実現せず、もう返らぬ話になりました。

副主幹、春果氏は、誰にも負けぬ川柳の愛好家で、北畠にあった旧制大阪高等学校の在学中、当時の城東線で通学するとき、既に岩波文庫の柳樽をポケットに入れておられたということをきました。

又、大阪帝国大学医学部の学生の時、阪大川柳会の月例会に、たまたま出席されて、卒業すれば出席を許すが、学生の間は投句だけするようにと、申し渡しを受けられたことがあります。これ程熱心な方でありました。

ご卒業後、あの医業の多忙な中を、月例会に欠かさず出席されて、佳吟を吐かれ、よきライバルとして、机を並べて勉強したことが

この間のように思い出されます。

柳号の春果というお名前は、健康のヘルスからとられて、日本文字にあてられ、春のよいうな健康という意図だということをおききました。

氏は、川柳雜誌不朽洞会理事長を初め、川柳塔副主幹、「翠柳」主幹、大阪市交通局文化部川柳会会長等々の沢山の役をされて、後輩の指導にあたられてこられました。

昨年十二月、隨筆、句集、聴診器という、二五〇頁の大部の本を出版されました。

氏は作句以外に、立派な隨筆をもされたことは、今更ながら再読して感心している次第であります。

昭和五十年十二月二十九日午後一時、枚方の御殿山の落町という名にふさわしい美しい小川の前の、御自宅での告別式は、歳末には珍らしく晴れた温かい一日でありました。参列しました私達は、春果さんのご人格通りのお天気ですなあと、あの眼鏡の奥のおやさしい目の故人を偲んで悲しい寂しい思いでありました。式場を取り巻く楢は、今迄勤務されていた各病院長から、現在勤務されておられた診療所の会社からと沢山ありましたがその中に、俳優森繁久弥氏の一対が目にとまりました。氏は故人と北野中学のクラスメートだということでありました。

式中、春果氏の生い立ちから今日迄の生涯を、煽々と哀しい尺八の音色の中に、ナレーターによって語られた時は一同目頭を熱く致しました。

春巢さんの御霊はよし天上致されましても、永されました医業と一貫された趣味の川柳は、永しえに社会へ、後輩へ物語られることでしょう。

春巢さん、安らかにお旅立ちを謹んでお祈り申し上げます。

合掌

## 悼 春巢先生

市場 没食子

井上湧三先生につづいて、北川春巢先生が亡くなられ、悲しい寂しい年の暮だった。

春巢先生とは、いつ頃から心易くなったか余りに古いので覚えていない。

大阪通信病院の鳥ヶ辻川柳会が、職場川柳の域を出ずマンネリ化して行くので、新風を吹込んでもらうべく、顧問をお願いした時は随分と心易い方であった。当時先生のお宅が通病の近くであった関係もあり、否応なしに引張り込んでしまった。以来真面目な先生はよくせきの所用の無い限り、路郎先生と顔を揃えて毎月の例会に来ていただいた。鳥ヶ辻と切っても切れぬ縁が、今も続いて居る。

先生と一所に川雑の編集部に名を連ねてた

頃、帝塚山の路郎師宅に行った帰りや、郊外に出かける時は、よく先生の職員乗車券に便乗してもらった事も思い出の一つになった。交通局病院に居られた時も、桃山市病院院長時代にも、三、四度お目にかかりに行った。いずれも患者のことで、始終迷惑のかけっぱなしに終ってしまった。

最近私も、血圧の外に狭心症の気味があり、御近所の開業医だけでは心許なく、日赤の草右先生に受診に行った時（十一月末日）診察の後で、春巢さん病氣と違うか、近頃雑誌に句が出ないので、案じていると、云われ慌わてて、句集聴診器の御礼を遅ればせながら送り、御伺いしたら、夏頃から再入院しているとの御代返があり、驚いて、次回受診日に草右先生に御報告したら、多分そうでないかと思つてたと云われ、私のうかつさが嫌になった。まさかと思う気もあり、年末の会社の多忙について見舞が遅れ、行けば後の祭り、誠に先生に申訳けないことになつてしまいました、御生前にお会い出来なかつたことを悔やんでいる。

今こんなこと書いてみると、あの温顔が、臉に浮んで来る。

思い出は多いため、鳥ヶ辻川柳会のことのみ書かしてもらつた。

追悼 吟

合掌

句集聴診器聞き先生に話しかけ

遺句 鳥ヶ辻誌より

新弟子は汁ばかりなりチャンコ鍋道ならぬ恋も楽しい差向い寝て運を待てる蒲団うすいこと株少し売って人間ドック入り口止めをしとして肩をポンと打ちみをつくし鳴ってゴロ寝が目をさまし遅刻したことも惚気の種となりお家はん猫の産気へつきつきり失恋をかくして白衣の裾が利き大広間上座の顔がかすんで居駈落ちのお腹は既に三カ月冗談にして抜道を考える。札束を持つては死ぬぬことは知り

（兼席題より）

## 春巢氏への追憶

若本多久志

昨冬、暮も押し迫つた二十九日、うす陽のさす風の冷たい日だった。

春巢さんのご葬儀の帰り道、又自分より年下の友を喪つた寂しさや無常感を一層深める中で、おつきあい願つた二十年余りの春巢さんを追憶しながら、御殿山駅へ遅歩を進めていた。

私の記憶に間違いなければ、春果さんを知ったのは、不朽洞会理事長で、交通局病院の副院長をしておられた頃だったと思う。

しばしば扇町の交通局病院の句会（川柳大坂）へも出席させて貰って、川柳談義を交したものである。

どこか几帳面な春果さんの性格が私を引きつけて、一身上の病氣治療や健康管理上のご相談もよく聞いて頂いたが、医者離れのした人間味のあるお答えが嬉しかったし、兎に角すっかり信頼の出来る友として、忘れ難い人であった。家内が倒れた時も、二三回往診を願って、普通のお医者さんでは言えないようなアドバイスを頂き、それは今でも守られていることに深い感謝の念で一杯である。

さらに書き添えたいのは、年中、旅行を楽しんでいる私が、旅先から差上げるお便りには、必ずご返事を下さる一人であったことも春果さんの性格を物語る一面であった。

さて、一昨年九月頃？、私が川柳塔の事務所に居た時、大変、緊迫した面持ちで訪ねて来られ、不二田君を別室へ呼んで、何かひそひそと話して帰られた……その様子をただならぬものを覚え、不二田君に訊ねると「句集出版（聴診器）の相談に来られたのだが、ちょっと気にかかる一言があった」と話してくれた。その後間もなく入院―手術―との続報を聞いて、あの時の気にかかるとの言葉もあり、私は、若しやと不安な予感に馳られたのであるが、今にして思えば、あの時既に「癌による死の運命」を予見されての覚悟が出来てい

たのであった。

その後、小康を得られて、三洋電機の診療所に勤められてからも、二三度お手紙や電話を頂き、平静、淡々のご生活のように見えたが、実は、死と対面することによって充実した人生の最終を生き抜いてゆこうとされた様子で、尊くも又莊厳にさえ憶えてならないのである。

誰であったか、西欧の哲人の言葉に「死を手もとにかきよせて生きる」というのが有ったが、命終の時に臨んだ心ばえで、一年有半、を生き抜かれた春果さんこそ、菩薩不退位の境界で寂滅されたものと羨望に耐えない。

いみじくもご葬儀の際、生々庵主幹が川柳塔社を代表してのご弔辞中でこのことに触れられ、私は知らず知らず目がしらのうるむ思ひであった。

甲 句

命ある限り教えに我生きん

多久志

## 分を守る

川村好郎

春果先生のあの温顔に永久接することが出

来ないとは。

四年程前私は病魔に犯され一カ月程入院し、ほんとうに九死一生を得て退院が出来たが、病後かんばんらしくなく、生々庵先生にお願いして当時桃山病院の院長であった春果先生に診断をして貰った。先生には直接診てもらえなかったが、各科の先生にそれは親切に従って行って紹介して下され、精密検査を受けることが出来た。その結果を詳しくしらべて頂き別に心配する病氣のない事を自分の事のように喜んで知らせて頂いた。そしてご多忙の中にも関らず院長室で今後の注意すべき点を細々と教えて下さった。この二時間余り先生のお話を聞くことの出来たのは永い間の先生とお付き合いのうちであとにも先にこの一回だけであった。

七十には七十の養生法があり、運動もあり、食養生がある。あなたとしての療養に努めることが大切です。

川柳でも同じこと、なが年築いて来た好郎の川柳がある。それを基盤として、進むことです。高飛びや走り過ぎないように。

「分を守る」これが私たちの養生訓であり、人生訓です。

「分を守る」この先生の一言私は今でも胸に抱いて離さない。おかげで七十の坂もころげずに歩み、遅々ながら川柳の道も私の道をたどっているつもりである。

今先生と永別するに当り、更にこの時の先

生の御教えがよみ返り、この道を歩むことが先生の御恩に報ゆる道かと思つている。先生、盡ながらお導き下さい。

悼むより感謝を込めた掌を合せ

好郎

## 米一升

正本水客

米一升持って善人氣が疲れ  
真面目で何時も控え目な春果さんと思うとき此の句が浮かんでくる。米の配給時代など知らないゼネレイションには分らない句になつてくる事はさびしい。

急逝へ飲んだ思い出ばかりなり

私は生来の下戸、残念ながら春果さんと対で飲んだ経験はないが去年の暮に「聴診器」を出された時から既に今日あることは悟つておられたように思われる。

一体いつ頃からのお付き合いだったのだろうかと古い句報の綴りを引っくり返してみた。昭和13年に鉄道病院に就職されて、14年春に川雑鉄道病院支部が発足している。

指汚す万年筆を持ち続け

病人の顔へばっかり蠅が来る

など如何にも春果さんらしい。

空襲のない日本の大文字

14年8月京の大文字吟行のときの句、まだ空の戦争というものを知らなかった良き時代が思い返される。23年10月に戦争の混迷から立ち上つて大鉄川柳会が再発足した際は春果、白鬼、苦楽公、蘇堂、水客等9名を同人としていた。当時春果さんは鉄道病院の第二内科医長であったが、26年大阪市交通局病院へ転属されるまで大鉄川柳の句報に発表された作品を通じて同氏を偲んでみよう。それ以後については他に人があることと思う。

国宝を拝むに恰度よい暗さ

先祖代々みんな此の間で昼寝する

伊勢海老のめでたい色になつて死に

静かにもを見詰める眼の確かさが感じられる。

12月某日奈良の寺に在る

恩人の放送妻にも聞かすなり

泌々と心の温さを感じる気がする。

寝返りの目に天井の鶴が揺れ

くどくどと神経衰弱診てもらい

赤チンを塗れば大人も気がすむよ

中風のまじないとも角やっておき

針医者聴診器まで持ってくる

病氣などの句は流石に鋭くウーンと唸らせるものが多い。

酒癖の噂が先に着任し

大ジョッキ二杯で人生観変る

長生に聞けば毎晩酒を飲み

酒の句ともなれば又いちだんと冴えをみせて

くる。謹厳な春果さんが減多に見せないが酒

興至れば、座ぶとんを三つ折にして赤ん坊に見立て、サック破れてこの子が出来てこの子にまだにゴム臭いと、鹿児島オハラ節ののせた身振り手振りのぎこちなさが無性になつかしい。

胃癌とは知らず入歯に通いかけ

28年2月の句報にこの句を見出して私の筆は

もう進まなくなつた。

春果さん、何時までも聴診器を放さないで

下さい。

春果先生と

## 「聴診器」

児島与呂志

川柳随筆句集聴診器が発行されました手にした喜びは、やっぱり春果先生の句集やなど皆さんも思われたことでしょう。読みやすい文の流れに、川柳をポイントに引用しながら配列される読者に対する心の使い方、さすがに読書欲の深さから来るものだと思ひ知らされて。

喪の部屋に師の計を告げる電話ベル

母を身罷つてまだ取り込んで居ました私の

心の動揺を静めかねて驚いた。

乗り換えてまたうまいこと席がとれ

## 春 巢

交通局病院に勤務されるようになってから川柳大阪の川柳部長として柳人を指導して戴き、川柳風流ばなしや柳文を掲載させて戴き、毎月の句会の帰りは時々飲み寄ったり気安く付き合せて戴きました。常に私の教えは「分」と云う言葉でした。春巢先生は医者としての立場を分として勉強努力を二十年私に教えて下さった。随筆柳話なども一般の書物にも書かれ、読みものにも川柳普及に努められ、自分の「分」を活かされていたように思い、私の師としてふさわしい先生だと思つて居ります。

川柳塔誌でのユー・マアや笑いで春巢先生の文筆はたくましい川柳普及への活力だと思つて居ります。常に麻生路郎先生、麻生霞乃先生を忘れず川柳を愛する心で先生から尻を叩かれ、不二田一三夫さんからも原稿依頼をされながら書いてたことに感謝されて居られた事を思い出します。

### 登りつめたが絶景と見えす

春 巢

春巢先生と私の兄と同じ歳でした。兄が胃ガンで再入院致しましてから、母の世話もありまして、春巢先生の病氣と云う事をお聞きしながらお見舞いする事もようせぬままにお別れ致して仕舞いましたので悲しみはつづります。悔しい心が涙にぬれます。

四十九年二月に兄を逝かせ五十年十二月二十日に母を逝かせました私は、その間に鉄児さん、永断さん、宗義さんと柳人を逝かせ皆さんとそれぞれ無沙汰のままに成つたように

思いますと本当に残念だと思つて居ります。

春巢先生の川柳が、春巢先生の逝かれましてこれからも、皆さんの心の中に残りますように何日までも聴診器を大事に座右の銘に致して下さいます。

春巢先生ありがとうございました。  
後悔がな追いますが喪の線香 与呂志

## 恩師のご逝去を悼む

山 田 季 贊

春巢先生は戦時中、滋賀の貴生川へ疎開されて居りました。戦後もそこから大阪鉄道病院へ通勤されていたのです。私は終戦の習年盲腸で手術をしたが、その折、実戦の習年盲腸で手術をしたの洗濯、谷脇素文著を病床のつれづれに読むよう呉れたのが川柳入門のきっかけになりました。大鉄芸誌に川柳を授けたりするうち、北川春巢先生から川柳を勉強するならば、これがよいとすすめてくださったのが「川柳雑誌」でした。

春巢先生が貴生川から大阪へ転宅される時には、そのお手伝いを見せていただくほどにまで可愛がってくださったのです。川雑句会へ出席する時は、いつも先生のお宅で泊めていただきました。昭和25年6月に広島へ転動になりましたが、そのころ先生の推薦で不

朽会々員になり、川雑の句会へ毎月出席しましたが、その場合はいつも先生宅で泊めていただいております。まるで身内のようにしていただいていたのです。

東海道新幹線工事のため私は大阪へ転動になり直接先生の指導を受けることが出来ませんでした。東海道新幹線試乗の際は、春巢先生をお招きしましたが、京都駅百メートル手前でストップでした。30分程待つて動くのを待ちました。10名ほど運転台から降りて京都駅構内まで歩くことにしました。

春巢先生は鉄道に勤務をしたが新幹線の高架上を歩いたのは始めてだと、後々もよくその日のことを話されました。

阿倍野の宿舎から新築の枚方へ移られた時もお手伝いしました。山陽線新幹線岡山までの工事も終り、ふたたび広島へ単身赴任することになったため先生とお会いすることも高知から飛行機で帰阪、大阪鉄道病院へ直行しましたが、春巢先生はわざわざお見舞いしてくださいました。先生が大阪市を退職後、胃かいようで手術されたことを私は病床で聞き、49年10月28日私の退院の日、スミ子と同伴で先生を大阪中央病院にお見舞い申しあげたが、翌年もまだ私は再入院、そして退院したときは先生もすでに退院されていて、共に元気な声で電話したことでした。

先生に8月31日に電話をしたら先生が再入院されたことを令息からうかがい、すぐ中央病院へお見舞いしたが、下痢が止まらないと

のことでした。その後5回伺いましたが、またまた私も再々入院。しかし年末年始の外泊許可があり、12月27日外泊の帰りに先生をお見舞いしようと思いついたが、主治医の注意を思いそのまま帰宅してしまいました。その日は先生は亡くなられたのでした。それを知ったのは29日の朝刊でした。

葬儀に参列することも出来ませんでした。先生はもう転宅のお手伝いの出来ない遠い所へ移ってしまわれました。

## 悼 医博

### 北川 春巢氏

#### 菊沢 小松園

暮も迫った十二月二十七日春巢さんが亡くなった電話があった。大きな葉がまたばさつと音を立てて落ちた心地がした。併しながら昨年夏大阪中央病院へ御見舞に上った際も元氣そうには振る舞われて居られたが、既に衰弱の様子も我々素人眼にも窺える程だった。この後小康を得られて御退院、再び手術の為此の夏入院されたと承って居たが、御本人の意志で一般には知らせたくないといふ公式に聞かされたので敢て御伺いするのは遠慮して居たが極めて癌の症状も進行している様に聞いていたのでそれとなく日夜お案じ申上って居た。塔の役員会の席上でも秘かに話題になっ

たが何分斯道の人であり、その道、医学博士の称号に輝く御当人、最善の道を選ばれていることでもありもう一度の再起を祈念申し上げていた。未だ老骨というお齡でもなく生来の頭脳の明晰、秀才コースを順風満帆と学校、社会と通信病院、市民病院と院長を歴任されて輝く栄光の足跡を残された。川柳人としても古いもので昭和十二年阪大在学中に路郎師の川柳洗礼を受けておられ、現在の川柳塔の中でも古い方に属すると思われる。句風も真面目に川柳の本格を歩まれ円満洒脱その人格を随所になされた飽きの来ない深味のあるものだった。近來の句に稍々薄くなったと謂われているユーモアの本質的な研究にも学徒として考察されて居られたことも今となっては惜しまれる。酒はなかなかお強い方で平素の重厚さに似ず飲めばなかなか愉快な酒だった。春風駘蕩として四辺の人を彼岸の夢に遊ばす境地にさせられた。昭和二十五年頃川雑主催の、あやめ池の記念句会の時の春巢さんの思い出など今もありありと心に浮んで反つて悲しさも一入、その情景も寂しく心が疼く。私の長男も幼稚園時代に春巢先生の診療を受け、その後五女の幼少の頃も御世話になったこともあった。それもこれも今は悲しい思い出になって終った。昨年末句集「聴診器」を出版された。近來稀な句集、内容外観俱に備わる好著の一つだろうと好評を博した。私も御惠贈に預つた、今から思えば御当人としては職掌柄よく今日を予期する処があつて出された句集では無かつたかとも思え

る。自分の命を蝕む癌細胞に次第に衰える肉体を見詰めながら最後の精神力を凝結して上梓された自分の分身の一つの句集を手にした。それらの春巢さんの心情如何ばかりであったことか、想像するだけで暗胆たるものがある。春巢句集刊行記念句会を何時開くかと話題になり、御当人にも都合を伺つたが春巢さんの心情にどう響いたことか、反つて心無い響りを留めたことでは無かつたかと今更なまればならぬ。立派な御葬儀に参列して数年前に新築されたお邸、御子息や奥様方に取り巻かれて、陽のあたるみち一筋を歩まれた御生涯、また悔の無いことであつたらうと御察し出来るのが切めて心穏やかにお訣れする我々の心の慰めでもある。幸に多年の御交誼を感謝して、その御冥福を心からお祈りするのみである。

#### 御礼申しあげます

合掌

川柳塔社宛

北川 睦彦 拜

前略—先日は、父の告別式にいろいろと御配慮いただきありがとうございます。

二日は初七日を無事すませました。

「川柳塔」二月号では父の追悼号や、二月の本社句会で父の追悼をしていただけるとか、父には何よりも結構な贈り物ではないかと、母や兄弟一同、喜んでおります。

さつそく父に報告いたしました。

有難うございます。

今後ともよろしくお願いいたします。—後略—



菊沢小松園選

八尾市 納 史 葉

棘のある言葉日記へとじ込める  
船を出す男にすがってはならぬ  
古きずを一つあげます西雲  
ネックレスはずして主婦の座にもどる  
核家族漬物までに本がいり  
一すじの涙男をはしらせる

鯛を釣る海老にする気の特級酒  
尾鷲市 渡 辺 伊津志

豊中市 安 藤 寿美子

おみくじの凶を今ごろ思い出し  
元旦の女の足袋のみな白く  
うららかや竜も口笛ふくような  
哀願の自分へ鳥肌立ってくる  
女五十黒いほむらを抱いている

羽曳野市 麻 野 幽 玄

手抜きする事だけ先に覚えてる  
本心はどうあろうとも泣いてくれ  
好きでないアルミサッシに替えさされ  
正直に木の葉は天に和して落ち  
換気扇秋刀魚の匂いまで届け

三重県 川 上 富 子

今朝の不和夕餉の膳が詫びている  
無い哀しさは他人の色柄まで覚え  
墓洗う心に詫びる事多く  
銭金は他人と利息付けて来る

逢いにゆく顔にレザーがよくすべり  
赤い爪どんな料理をつくるかな  
親と子を時代の波がひきはなし  
現実に戻ると虹が消えている

松江市 梅 本 登美也

ある時は猿になりたいさるまわし

和歌山市 桑原道夫

耐えぬいて耐えぬいて時計の針動く

助け合いのピラをルンペン読んでいる

迷い犬覗いて交番誰も居ず

石仏の頭を避けるぼたん雪

大阪市 堀口欣一

修道尼の胸にクロスはいぶし銀

第二の人生という再婚通知来る

江戸前の春さんざめく舞扇

年わびし今日も眼業差して寝る

名古屋市 大林曲ん手

花活けて女心はかくせない

死の暗示看護婦までも無言なり

冷戦の箸は重たきものと知る

ベレー帽そんなに禿が気になるか

大阪市 欄蘭

居留守です子供の顔に書いてある

六甲の峰より冬が駆け降りる

天高く人の心も信じたし

へらへらとして居て利害に強い人  
姫路市 大原葉香

誰が為粧う紅葉過疎の村

札数う指のリズムの確かなり

見送りに出迎えない夫婦です

信号の青退屈そうにスト続く

新宮市 西尾功

云うことが無いので秋の空を賞め

身構える電話へ妻の声がする

好物も添えて墓石に語りかけ

朝の駅日本人はたくましい

備前市 武内雅堂

人生のスタート祝う借り衣しよう

背伸びする子へ凡人の母でよし

一すじに生きる男のにぎりずし

手術台心の整理つかぬまま

島根県 松本文子

除夜の鐘ふんぎりつけるように鳴り

じゆうたんの赤心まではてるよう

木枯が心のほてり鎮ませる

冷えてくることばの端を嗜みしめる

唐津市 山下勝一

お巡りも人です腹でストをや

呑み込んだ言葉に友情害わす

また何か起りそうだよ法治国

八戸市 安田紘

花道をすぎたらレール敷いてない

裸で生れても裸になれない

クラス会肩書ないのが管を巻き

尼崎市 中谷利美

泣き寝入りさせて説得したつもり  
手ぶらではおんな歩けぬものとする  
話術には学ぶものあり叩き売り

大阪市 芝原路春

手を握りしめても血は通わない  
しつけ糸抜くひとときの妻の幸  
こんなにも女の指は反るダイヤ

今治市 渡辺南奉

言い出せば金があるので黙っとく  
灯を消せば嘘が上手にかくせそう  
仮面みなつけた和となる婦人会

今治市 古野伶人

新幹線直ぐ来れますと娘を取られ  
御主人で食べて内職着物にし  
面砲と黒子ズームレンズに捕えられ

今治市 今井松花

式までの三日が待てず逢いに来る  
箸袋括げて貼った旅日記  
美しくもみじする山儲からず

今治市 真山国彦

染めてると知らずお若いことを褒め  
日本一の顔で賜盃をぐっと受け  
花嫁にしびれ切らさぬ色直し

今治市 和田宏

税務署もしめ上げようがない不況

何もかもしゃべって肩が軽うなり  
弁当の声で目ざめる寝台車

寝屋川市 柴田恵美子

うるし闇お宮の松も眠ってる  
つまずいたまま親となり孫も出来  
達筆のほこり筆ペン寄せつけず

島根県 岩田三和

健康に暮せる星が雲がくれ  
妻でぬぎ日の出と共に母を着る  
フランス語の注文どんな料理やら

大洲市 宮尾みのり

底冷えの舗道コツコツコツひとり  
ここからは学歴ものを言うポスト  
ほころびもさびも絆にのせ夫婦

豊中市 高橋古啓

飽きがきた自由は奴隷になりたがる  
星たちへ瞬く地球はクリスマス  
昼火事の野次馬になる市場籠

熊本市 有働芳仙

突き当る相手も下を向いていた  
十大ニュースめでたいことが少なすぎ  
すねかじる子に囲まれし雑煮箸

羽咋市 三宅ろ亭

三次会前後不覚を置いて去り  
それぞれの味見せくれた子のねぐら

名誉職色気ないのが担がれる

八尾市 田中 紀美代

別れると食欲の出る女です

片言の孫がはなれぬ電話口  
つまずいて沁みじみ亡母のありがた味  
変人のレットテルはがさぬままに老い

化粧映えするわと妙な賞められよう

岡山市 時末 一 灯

泣いている裾とも知らず風が戯れ

二度手間を笑われている私  
小包へ母の心のおれやこれ  
立ちよれば倅せそうな笑い声

中年のこれが最後か鈍く燃え

和歌山市 榎村 ふみよ

また逢える気が五六歩を確かにし

何もかも生きていたらの愚痴になり  
子を背負う亡妻の重さかも知れず  
就職は教育ママの意に副わず

明月に別れて萩のやせほそり

今治市 原田 琲伽里

寝屋川市 江口 度  
流れが止まると汚ない札まが浮いてくる  
妻の方が重い病気で寝て居れず  
お隣りの屋根へ気がねな枝がのび

還俗の思い木魚がはね返し

岡山県 長尾 保

足音で判るベッドの片思い

じゅうたんの色でもめてるいい夫婦

スト中の踏切りやっぱり停止くせ

伊丹市 榎谷 漫 柳  
就職の電報一家を春にする  
労働の汗は季節を選ばない  
何時の日か子供等が見ん日記書く

全機能停止ぼんやり三カ日

和歌山市 西山 幸

花の名を聞いてはみたがすぐ忘れ

墓場まで守る秘密に酔っている

コピ―しておきたい心の虹を見る  
楽園を追われても恋捨てきれず

鳥取市 平井 節子  
役所のと趣味のと名刺使いわけ  
急行の遅れを鈍行待たされる  
初恋の相手だったと言える歳

鍵っ子へ夕餉を急ぐ市場籠

予報より母の見立てで傘を持ち

ドラマ化へ過疎地一躍跳ね上り

和歌山市

松原寿子

吐息まだほのかに残る受話器置き

誘い水へ濡れた慕情がほとぼしり

決意する目と目に言葉などいらず

唐津市

岩下照沖

頼らねばならぬ手摺の冷たさよ

しのび逢う帯締めた夜の立ちくらみ

雪しんしん岡田嘉子よカチューシャよ

吹田市

藤原儀春

ヒマラヤにウーマン・リブの旗を立て

ハネムーン一嵩ばる土産ばかり提げ

立てびざで他人の惚気聞いている

岡山市

井上柳五郎

はったりに戻すことばを模索する

倅せであると自分に言い聞かせ

広島県

原田篤史

地下街を出ることは出た田舎者

本堂の筆もかわいて世をなげく

兵庫県

高橋近江

底力出るのは笑顔が消えてから

真っ直ぐに帰った何よりよい土産

鳥取県

加藤茶人

戦争の爪跡戸籍で知った異父

惚れ抜いていつか野良着まで似合い

堺市

堀畑日日子

老妻もヘヤードレスで屠蘇祝う

へそくりを遺産といいはる税務員

鳥根県

堀江蓮露

値上りを決めた時には瓶が空

侃でさえ左へ傾き右へゆれ

大阪市

平井露芳

筆ペンでどっちつかずの年賀文字

春夏秋冬雷鳥四季の貌となり

鳥取市

岸本無人

万葉の歌で辺地も客を呼び

好きなどと笑られそうではめておき

堺市

栗本藤持

世辞もなき老舗の菓子がよく売れる

疲れたり服脱ぐ間にも坐り込み

寝屋川市

福富隆子

人間が円くなつたは少しぼけ

貰いすぎ貯めすぎそろばん忙しい

鳥取市

有田鹿の子

年末のパーゲン不況が跳ね返り

何気なく聞いた言葉に刺があり

弘前市

小山内貞男

下積みのみくらしに堪える生字引

短命の花なればこそ美しく

東予市 小山 悠 泉

笛吹けど踊る余裕がない不況

意地張って別れた人の事思う

大阪市 新川 貞 祐

喜寿近く今年も賀状刷れる幸

ストのリーダーキリスト程は瘦せていず

島根県 飯塚 虎 秋

風紋のいのちに朝あり夕があり

片すみへ骨董品のように明治

泉佐野市 大工 静 子

仲人に叱られぐつと腹きまる

枯れ落ちた一ひら水とたわむれる

富田林市 中村 優

花鉄尼僧へ女の顔もどる

三カ日狭い日本が広くなり

高知市 竹崎 寛

ひとりぼちの影も哀しい秋を連れ

噴水のぐるりに恋が芽生えそう

高槻市 山田 スミ子

パートタイムの苦勞を夫へ打ち明ける

宿題へ抵抗鉛筆の芯尖らせる

橿原市 西本 保 夫

毒舌のボクを課長は聞き流し

もう間近か汚職もせずに来た定年

大阪市 牧 ときを

食べ盛り秋刀魚焼く間が待ちきれず  
月見草夢二の絵葉書いまはなし

今治市 伊藤 藤 一 郎

良縁が独り暮らしの根をゆすり  
色気など無いのがやきもちだけはやき

岡山市 船越 洋 之

引越しの日の朝刊は忘れられ  
どう飾ってみても悲しい籠の鳥

新見市 吉田 落 猿

子も孫も帰らぬ過疎に老い二人  
目が覚める今日も鼓動が鳴っている

大阪市 横地 正 彰

老婆みな亡母を感じて振りかえり  
母逝きて大地に穴のあく思い

唐津市 田口 虹 汀

土曜日の疲れはなぜか軽くとれ  
門も戸も去年のままを松飾る

岸和田市 池田 香 珠 夫

怪獣の傑作竜として残り  
やわ肌のサンドウイッチになるラッシュ

岸和田市 池田 露 子

まぼろしの竹の花見るバスツアー  
共に死ぬもよしと夫婦の空の旅

羽島市 伊藤 藤 静 枝

考える刻に手編みを友にする  
葦原にものあわれを探りゆく

東大阪市

崎山美子

汐時をのがさずチップにぎらせる  
特效薬ほしい我が家の台所

西宮市

朝山千世子

三億円とうとう騒ぎ損でケリ  
弾き初めの松の緑に若がえる

鳥取県

福田保子

新参の仲居は猪口を恐く受け  
ムードにも酒にも慣れて夜を稼ぎ

西宮市

井上 のぼる

一声で意見まとまる飲む話  
日向ぼこ孤高の父は耳遠し

橋本市

森脇善彦

せめてもと回転椅子を買いました  
切り返す一步手前で友思い

河内長野市

井上喜醉

嬉しさが余って隣へ分けにいき  
姉さんと呼びしてくれる人ができ

今治市

薦本昌道

見られてる意識の中のコンパクト  
薄情と見られたくない赤い羽根

七尾市

松高秀峰

宴会になって本音のクラス会

達筆な年賀机上へ出して置き

尼崎市

中塚喜甲

オートバイ三億円のかたになり  
永持をさす気妻の肩をもみ

大阪市

小谷清女

廻れ右こんな人とは話すまい  
気を使う言葉に黙って笑っとく

大和高田市

岸本豊平次

煙草買うついででもあると送られる  
高層のマンション朝湯を先取りし

大阪市

内藤ますえ

タイミングはずして話すのも話術  
客一人残してよっぽどもめている

大阪市

須浦つね

無人駅コスモスだけが咲き乱れ  
馴れ過ぎた鳩自転車がよけて行く

今治市

大本バット

好きな事云うて金まで取る老師  
ヒスト云う手で発散をさす女

新潟県

高野不二

惜しくて飲まぬままへってゆく黒ラベル  
買う本が読む早さには追いつかず

尼崎市

駒村岳麓

年の暮着付けの本が売れている  
主義よりも爆破のスリルに落ちて行く

唐津市 田 中 紫 浪

下駄の緒が切れて不吉な夜を急ぐ

亡き友は表札にだけ生きて居り

岡山県 池 田 半 仙

クリスマスケーキ待ちつつ子は眠り

看板が二通りあった観光寺

鳥取市 勝 山 紫 宏

島根県 安 達 潮 音

宝籤当たった顔になつてくる

新潟県 市 川 一 峯

歎を持つ身にスト権はあるまじく

違法ストそれでもボーナス増えたとは

八戸市 島 田 昭 治

豊中市 出 口 セツ子

安楽死ねがうとしより長寿国

大阪市 村 島 秀 村

病棟の異変は肌に突き刺しぬ

おえら方さえちぐはぐ庶民なおのこと

大阪市 花 田 繁 子

「あかんな」とつぶやく医師の声無情

唐津市 岩 崎 実

トンネルの向うに見える海は青

唐津市 筒 井 朴 竜

スト明けて遠く列車の音聞ゆ

唐津市 三 浦 ひろ坊

初日の出小さな欲を忘れさせ

唐津市 筒 井 朴 竜

わが愛はケーキの小箱バスを待つ

中味より箱が豪華な贈答品

労組役員人相よいは見当らず

まわしました。ご諒承のほどを。

唐津市 筒 井 朴 竜

ほろよいを借りれば独りの貌出来る

出雲市 藤 井 晴 月

☆社告にあるように四月号から「水煙抄」

☆本社の新年句会は流感のため常連が相当

## ・第2編集室・

の選者は川村好郎氏になります。北川春果

の二五(電大阪・703・3046番)へ

多く欠席されました。お見舞い申しあげま

氏の急逝により一年繰り上げていただきました。

☆二月から本社句会の会場が変わりました

て食い過ぎでしたが、過労が原因でした。

した。「同人吟」は若本多久志氏。

☆本社句会の2月の兼題予告は4月以後に

た。重ねて寒中お見舞い申します。(F)

☆これも社告のように「愛染帖」の選者は

日籍切で〒546大阪市東住吉区湯里町一

私も何十年ぶりかでダウン。例によ

路郎賞  
川柳塔賞

# 候補作品中間発表

自 50年9月号  
至 50年12月号

## 路郎賞候補作品

(到着順)

正本 水客

若本 多久志

新岡回天子

菊沢小松園

退院したら話したいことみんな消え

千手観世の一手が枕母眠る

虫籠の哀れ真昼の陽があったり

駅前のうどん屋乗る汽車聞いてくれ

地の底の母までとどく冬の雨

みの虫よ月の光りを父と見よ

父似か母似か 亀の子目がさびし

ゆずられた席で老人ねむくなる

虫のようからと乾いて死にたいな

そっとペン置けば鈴虫そっと止め

虫が鳴くのでごみだめを振り返る

堀江 芳子

香川 酔々

若柳 潮花

都倉 求芽

高杉 鬼遊

三井 酔夢

不二田一三夫

岩本雀踊子

有信新之助

清水一保

戸田古方

費うためのお金ですよと妻も老い  
牛の口かみ切りそうにススキ喰い

草深酔升

ある時は無知も倅 瞳をつむる

母に似た古い女の鍵を持ち

おふくろの十指は弥陀の掌にも似て

番犬を飼って他人を信じない

モナリザの過去が知りたい日の微笑

夏雲に語りつぐべし戦没記

地の底の母までとどく冬の雨

一片の雲流れに交わらず

夕化粧虚構の中の演技かも

雲を描く少年雲に抱かれる

全身で女 見つめる猫目石

やりくりへ金は冷たく笑うだけ

和田維久子

高橋 夕花

松下 梁水

小浜 牧人

宮西 弥生

中村ゆきを

高杉 鬼遊

天正 千梢

関 美子

川上 大輪

本多 柳志

嘉数千代香

紫陽花の騙し始めは白で咲き

本当の答は神にまかしく

美しく老いて小さく会いにくる

左遷の地ここには蜻蛉も蟬もいる

教会のローソクだから揺れはせぬ

一枚の紙の重さを知る夫婦

刑事から見れば瓜田の靴ばかり

聖人のようなくらしをバカという

節くれの十指を見られまいとする

全身で女 見つめる猫目石

紫陽花の騙し始めは白で咲き

クローラーの部屋で工事の指図受け

原田 一風

和田維久子

土岐トク子

野田素身郎

高杉鬼遊

小出 智子

吉田圭井堂

工藤甲吉

岩田美代

本多 柳志

西尾 栞

原田 一風

大矢十郎

陽の長さタイムカードは持たぬ妻 小野克枝  
 伴せは顔まで育ての親に似る 高橋 操子  
 人形の笑ったままで蓋をされ 三宅 不朽  
 管理職手当で忠誠誓わされ 遠山 可住  
 おふくろの十指は弥陀の掌にも似て

チウインガム踏みつけふみつけ阿波おどり 松下 梁水  
 ピンチ 安全牌がない 高橋千房子  
 民宿へ泊り仏壇まで拜み 柳葉 鶴丸  
 とつおいつするとも知らず自動ドア 嘉数千代香

露地裏の塀から猫に見下ろされ 吉田 水車  
 愚痴いうて甘えてるなど自省 黒川 紫香  
 西 いわを

### 川村好郎

煩悩無尽生きてる証掲明らさま 野村太茂津  
 一分の黙とうですむ記念日か 三井 酔夢  
 地の底の母までとどく冬の雨 高杉 鬼遊  
 ソロバンをはじくとみんなゼロになり  
 野坂つき子  
 芋虫の頃もあったと蝶おもう 西 いわを  
 身構える暮しへ稼ぐ詩があり 江城 修史  
 ピカピカに研いて切れ味悪くなり 傍島静馬  
 しまい風呂今日を心に問う鏡 林 瑞枝  
 忘れてた土の香りが指にふれ 岩本雀踊子

## 川柳塔賞候補作品

### 大坂形水

ダイヤルで心を結ぶ飯場の灯 小山内貞男  
 蟬はなく残り少ない木にたかり 江口 度  
 鉄の手上げて花から笑う顔 樗村ふみよ  
 小気味よく喚べて女は強く生き 柴田恵美子  
 一番癪な女房の批判 真山 国彦  
 階段の踊り場にある恋のわな 渡辺伊津志  
 白桃を剥くとき心よぎるもの 堀口 欣一  
 笛持てば笛で指図をしたくなり 桑原 道夫  
 成仏をした貌でなし冷凍魚 中谷 利美  
 真ん中で寂しがりやはよく喋り 宮尾みのり

### 戸田古方

点滴も地球の引力知っていた 大原 葉香  
 賞与とはストと怒号でとるものか 三浦ひろ坊  
 はじめからしまいまで花の長話 高山みどり  
 老眼鏡やっぱり見たいのを追い 麻野幽玄  
 雑草が詩をもち寄って秋らしく 田中紀美子  
 胡桃にも弱いとこあり真二つ 船越 洋之  
 月見草吾が半生は酔うたふり 高橋 古啓  
 喜びをこぼさぬように指にぎる 安藤寿美子

八時十五分までは両親生きていた 園部正則  
 虫一匹殺さぬ花の短命さ 森脇 善彦

### 橋高薫風

冷飯を犬とわけ合い一人の夜 安藤寿美子  
 外国課全員揃うカラージュッツ 堀口 欣一  
 うまず女の責は他人の子を抱かず 麻野幽玄  
 ぬるい湯が好きで色気のある女 柴田恵美子  
 いるかの背中に自由がおどってる 秋田 茂  
 さざ波のひとつひとつにある夕陽

秋深し他人のごとき妻の顔 松本甫久路  
 なまけてるのが綱引きの中にいる 岩下 照沖  
 表情のない看護婦に押し切られ 渡辺南奉  
 秋に咲く桜をふいと憎くなる 真山 国彦  
 小谷 葉子

黄銅六角ボールトナット  
 及び特殊換物全般

### 西出螺子製作所

大阪市天王寺区空堀町八番地  
 TEL 06 三四五二一四  
 夜間 06 四四〇八

# 愛染帖

## 橘高薫風選

雪女愛に目覚めて雪捨てる

松原市 谷垣 史好

人恋しラムネの玉を鳴らすなり  
やわらかい風が吹く日の出来心

岡山市 行本みなみ

痛いところに撞木が当り鐘が鳴る  
夢に見る迄は忘れていた顔だ

神戸市 小浜 牧人

古背広父の疲れが掛けて夜の風  
女と易者のコント哀しい夜

岡山市 川端 柳子

アトリエで魔性になった花の貌  
気に入らぬ話か笑顔のみ返し

八尾市 高橋 夕花

枯葉が鳴って女ごころをすぐ閉じる  
愛の言葉の一つや二つあるけれど

伊丹市 小川静観堂

風雪に耐えて枯木の米寿かな  
使い捨てでもあるまいが従四位の米寿

豊岡市 木山 遠二

ひげを剃るたびどんどんと皺がふえ  
年金で三億円を割って見る

倉敷市 小幡 里風

孫が手をひっぱる方にある平和  
濡れ衣のぬれたまんまの長い夜

尾鷲市 渡辺伊津志

盲人の杖が荒野を開拓す  
紅葉や托鉢僧にリズムあり

八戸市 小泉 紫峰

床の間の花が素的な雪積む日  
不快指数例の酒ぐせ知ってる

八尾市 大路 美幸

とどめ刺す友情ぐらいは持っている  
嫁がせて母は死角で皿洗う

倉敷市 能登原白水

割愛をしたりされたり老夫婦  
ルーシユひく首をかしげた小鳥籠

今治市 今井 松花

停退の思い出知事の代読し  
見て欲しい辺りへ下げるネックレス

大政市 西出 一栄

雨垂れのように聞いとく老いの愚痴  
古稀すぎて余生きらめくものが欲し

鳥根県 堀江 正朗

手さぐりへあまりに多い曲り角  
煩惱を頒つ一輪さしの花

倉敷市 水粉 千翁

憧憬の一つ雪積むわが住家  
ほろ酔いのあげくに封がはがれてる

鳥取市 勝山 紫宏

男と女のみことな嘘だったな海よ  
美しい返り血浴びてあとずさり

竹原市 三宅 不朽

心臓の機嫌さくさく菜を刻む  
嘘つくそれで安らぐ心なら

鳥根県 飯塚 虎秋

手品師の指も正午の箸をとる  
たち切れぬ旅の渴きよ雲の峰

八尾市 香川 酔々

蜜柑たべたべ女の黙秘権  
抱きしめるものなくやせるこの乳房

備前市 武内 雅堂

止り木にくる一匹のけもの撰る  
吉田 水車

鳥取市 河村 日満

抱きしめるものなくやせるこの乳房  
吉田 水車

名古尾市 吉田 水車

青森市 工藤 甲吉

貧乏にも天から白い便り来る  
冬はしむ天衣無縫のふところに  
ある時は人一人見ず冬の橋

大阪市 正本 水客

修業僧のかたまつてゆく寒さ  
春の頃から紅葉の美しさを思  
柿むいている人妻という安堵

豊中市 高橋 古啓

隼属の靴は先からちびて来る  
大理石善と悪とが磨き合う  
汽車が出る記憶の底の玩具箱

守口市 羽原 静歩

反逆は正しい冬の火花かな  
猫のひげ太くなつたら冬です  
ね

和歌山市 桑原 道夫

電線に並んだ雀飛び立てず  
幕できて石屋ほんとに嬉しそ  
う

池田市 杉田絵巳子

白水仙たたげ割るるごとく牙  
ゆ

横綱の胸の厚さへ憤り

背伸びしてまで物乞いを何と見た

北風に耐えて決断迫られる

異和音へネジ巻ききれぬ巻ききれぬ

静かなる斗志茶柱のみこんで

阿弥陀籤羊の角を突き合せ

ちからつきわが故郷の歌も出ず

冬の夜の茶房覗いて独りをためらう

バラバラオーバー脱いで恋温め

熱の子に祭り囃が遠くなり

アンバランス養子も親もそう想い

着物ショーモデルの顔が気にかかり

波頭かもめ太平洋に生く

胸に棲む鬼をなだめて今日も暮れ

心の中に錦織りなす経の文字

お母ちゃんと言った気がする娘の遺品

ペンノート鞆川柳行状記

四面楚歌慕標につづく道探す

東京都

高槻市

島根県

東京都

岡山市

名古屋

西宮市

橋本市

新宮市

倉吉市

高槻市

尾崎市

豊中市

大阪市

堺市

松江市

八尾市

八尾市

山根 白星

山田 季賛

小砂 白汀

小川 悠泉

船越 洋之

大林曲ん手

朝山千世子

森脇 善彦

大矢 十郎

奥谷 弘朗

若柳 潮花

黒川 紫香

安藤寿美子

西川 誓二

伏見 茂美

岡崎 祥月

宮西 弥生

宮西 弥生

一つのペンチ三者三様懐手

帯きつく締めて秘密を抱きつつけ

秘めて待つ消えぬ温みに溶けた夜

急停車高いヒールに笑われる

阿波踊り腰のひょうたん地をすって

本棚の一劃占めて聖書あり

分相応買ってそそくさ街を出る

六甲の山に父あり母があり

私も好き母が好んだ濃紫

温い言葉背にして去り難く

冬の夜のぬくい言葉を復讐し

尋ね疲れた果ての大原三三院

飾り気のない妻きょうもイワン焼く

口先に乗って弱点握られる

おかたくて背の君一人まだ出来ぬ

新月の角もなまめく春の宵

虚勢張っているのに影まで肩を張り

虚勢張っているのに影まで肩を張り

今治市

岸和田市

和歌山市

和歌山市

岸和田市

今治市

大東市

神戸市

貝塚市

大東市

富山県

羽曳野市

岡山県

今治市

出雲市

今治市

大東市

大東市

ポーナスの無い身を銀行責めに来る

川消えて橋の名町の名で残り

マネキンがドキリとさせるあるボーイズ

桃割れのうぶ毛がおぼろらしくする

愛情は与え与えて増えている

妻も子も知らぬ素顔を別に持ち

自動払いにしてから通帳やせてゆき

得た人気がざらりと捨てて母となり

心から憎めずためらっている遺言書

病む身にも屠蘇の香りに酔うてみん

職安がふるいにかける世となりぬ

ストライキ斗志をピラへ叩きつけ

好きなひと出来て世界が廻り出す

襟立てて一途の恋の向い風

行く手模索する断章という勿れ

行く手模索する断章という勿れ

行く手模索する断章という勿れ

行く手模索する断章という勿れ

竹中 綾女

古野 伶人

真山 国彦

池田 半仙

江城 修史

欄 蘭

神夏磯夏子

新川 貞祐

安達 潮音

梅本登美也

葛本 昌道

藤村 べ女

月原 宵明

三宅 ろ亭

三宅 ろ亭

三宅 ろ亭

三宅 ろ亭

三宅 ろ亭

今月からの投句先きは

〒5446 大阪市東住吉区湯里町一の二

五(電話大阪・703・3046番)

正 本 水 客 宛

締切毎月十五日(一人三句以内)

# 百人一首と川柳 (20)

## 富士野鞍馬

### 六〇 小式部内侍

大江山いく野のみちのとほければ  
まだふみも見ずあまのはし立

この歌は、「金葉集」雑の部に、

「和泉式部、保昌に具して丹後国に侍りける頃、都に歌合の有りけるに、小式部内侍歌詠にとられて侍りけるを、中納言定頼局の方にまうで来て「歌はいかがせさせ給ふ。丹後へ人は遣はしけむや。使はまうで来ずや。いかに心もとなく思すらむ」など戯れ立ちけるを、引とどめて詠める。」

と詞書してのせられている。

丹後へ行っていた母の和泉式部に、歌の代作をたのんだか—と定頼(六四)が、からかったのに対し、小式部は即座に、この歌を作って見せたので、定頼は返歌もせず、袖をひきはらって逃げた。この時小式部は十五才であった。つまり定頼は少女にやりこめられたのである。

おとなをやりこめた歌も定家入れ

洗路(二二三)

小娘にいくの道の道ではりこまれ

徐水(四二二)

小式部にいく野の道ではぢかれる

一舟(八三二)

まだ文も見ずとは娘やつてのけ

カスミ(九九七)

小式部が便り尋て赤面し

喜柳(二二四二)

小式部は地利を巧者に口こたえ

雨声(二六二九)

橋立の夫から何さ何さやみ

松丸(二二七〇)

橋立と文珠も恥る才で詠み

帆布(二四〇七)

橋立の後は諸卿も甘く見ず

喜柳(二二丙七)

橋立の和歌小式部の初舞台

菅子(二二二八)

と多く川柳にも詠まれ、また「大江山」を詠んであるので、

大江山鬼も和らぐ名歌也

シクト(五四八)

鬼のすむ山をやさしく一首よみ

孤妻(三二一)

歌によむ時はやさしい大江山

曙山(二六二七)

敷島の道はやさしい大江山

紀業(六二二)

小娘の当意即妙大江山

呉竹(九七二五)

悪くちの袖をひかへて大江山

三輔(二〇〇八)

定頼の顔紅葉する大江山

杜藤(七八七)

小式部は形りにも似せぬ山をよみ

松歌(五三二)

小式部の手柄一首の大江山

三箱(二三四五)

小式部は歌道に鬼の大江山

株木(二二六三)

うたがいの雲はれ渡る大江山

寿山(八三二八)

返答のほまれ梅花と大江山

喜柳(四二二〇)

——梅花は宗任が公家衆をやりこめた歌

文句取りのバラ句に

まだ文も見ずいく野の道を知り

里鳥(七五二)

小式部はいくの道をまだ知らず

関守(二一九)  
小式部にいく野の道はちと早し

松野(八八七)

母和泉式部を

母母たるゆえ子たり小式部

晋子(二二三)

大江山後のたよりに母は聞き

喜柳(四五三)

百人におぼこ娘が一人也

猪牙(四二四)

小式部内侍は、橘道貞を父とし、和泉式部

(五六)を母として、長保二年(一〇〇〇)

に生れたと推定されている。その翌年、母は

道貞と別れて、彈正尹為尊親王と近づき、そ

の覺後は帥宮敦道親王と結んだ。また寛弘四

年(一〇〇七)、帥宮が薨じて、一、二年の

後、一条天皇の中宮上東門院彰子に仕えたの

であった。小式部は、その間、母の家で育て

られ、十二才のころ、母に伴われて同じ宮に

出仕した。母は間もなく、藤原保昌と結婚

し、丹後に下ることになったので、小式部

を、同僚の大輔命婦のところへ預けた。「大

江山」の歌は、その頃のことである。それ以来定

頼は、小式部に恋を感じたのであった。

ところが小式部は、寛仁二年(一〇一八)

二条関白藤原教通の男子を生んだ。その後女

子をも生んだが、いつの間にか教道とは縁が

絶えたらしく、その間に教道の異母兄頼宗

や、藤原範永とも交渉があったようである。

そして万寿二年(一〇二五)十一月に、滋の

井頭中将公成の子を産んで死んだ。時に二十

六才であった。

母の夫藤原保昌の弟が、盜賊袴垂康輔だと

いう伝説があるので、

小式部が緋の袴までぬすみ出し

瓦舍(五五八)

おち様といふなと小式部を叱り

(二六五)

などと川柳にも作られている。

また「忠孝名誉奇人伝」に

「小式部は和泉式部が女なり。其頃何人か

納めけん、北野に月に時鳥の名画の額あ

り。此額の時鳥音をはつするとて、これを

聞んと諸人群集す。或時小式部、北野に詣

つひでに、この額をながめしに、音をはつ

する事更になし。

「なげきこうききにきたののほととぎす」

と口ずさめしかば、額に画かけるほととぎ

す、おのれと美音をはつせしとかや。」

とあり、その様が国芳の錦絵にも描かれて、

川柳にも詠まれている。

北野では義理つめで鳴く時鳥

(四四七)

神前での字を五つよんで聞き

窓梅(二六九)

書いたものをいったは北野なり

美徳(三二七)

時鳥さようならばと鳴いたやう

(三二七)

絵そらごとはいはれない時鳥

(二二〇)

ほととぎす鳴きつる方は北野也

かつを木をいかにして絵馬の時鳥

西澤(二八〇)

鳥なき里の一声は北野なり

(三四四)

北野中ひっくりかへす時鳥

藤丸(八〇三)

天神を押し時鳥をたづね

川長(二三三)

### 六一 伊勢大輔

いにしへの奈良のみやこの八重桜

けふ九重にほひぬるかな

この歌は、「一条院の御時、奈良の八重桜

を人の奉りけるを、その折御前に侍りけれ

ば、「その花を題にして歌詠め」と仰せ言あ

りければ」と詞書して「詞花集」にのせられて

ある。それを川柳は次のように詠んでいる。

御所近く匂ふ名所の八重桜

万仁(二八七)

大和の桜山城で伊勢はほめ

川島(二六三)

九重に詠んで名高い八重さくら

花夕(三七六)

大輔は奈良の桜を京で嗅ぎ

兼持(八〇三)

一重ほどおとつたやうにならぬ京

(武三三)

奈良桜一重よけいに匂ふなり

品能(四二二)

奈良桜はとんだ遠くへにはひ

(四二二)

市風（三六）

七大寺御法の花も八重桜

杜鰐（八四二）

旧都の名歌八重桜山桜

如作（二八九）

——山桜は平忠度の志賀の都

京九重に匂ひぬる茶粥の尻

ヒツメ（二四三）

——文句取り京の悪口

伊勢大輔は、伊勢の祭主大<sup>おおなかとみ</sup>中<sup>なかつ</sup>臣<sup>おみ</sup>輔<sup>すけ</sup>親<sup>のちか</sup>の娘

つたようである。

句画集「生々楽天」刊行記念句会

会場 金風会館（3月8日6時から）

柳話 若本多久志

祝辞 西尾 栗

兼題 「生」 正高薰風選

「絵」 橘水客選

「踊」 菊沢小松園選

「天」 川村好郎選

今治市 月原宵明

ネックレス純潔示す位置にあり

自嘲する視角に山茶花は白し

暖房が効いて靴下匂うてき

大洲市 米沢 曉明

これも旅 高千穂峡でボート漕ぐ

数の子のない正月に馴れ切って

焚火燃えさかったあとへ人が寄り

みかん上げるわ悪いけどもぎに来て

名古屋市 鈴木可香

飲まず喫わず結構生甲斐感じ

善人の無口ときには卑屈とも

油の切れた戸車に似て七十一

岐阜市 市川鱗魚

宮内庁御用の舗もビルの谷

大阪に慣れてくすぐるような嘘

あきらめてもらう話にかり出され

保護家庭奥でピアノを購う話

東京都 池口 呑歩

スト終えて気まずい顔と逢う廊下

スト終り今日は昨日の敵と飲み

スト終り勝てば勝ったで苦い酒

今治市 長野 文庫

強く弱く撻に応じて鳴る太鼓

雨降って固まる時と流す時

変化とは結局消えてゆく事か

# 作

# 近

鳥取砂丘の柳友著

# 『三人句集』を読んで

八木 摩 天 郎

寒風吹きすさび、街は二年続きの不況にあえぐ歳晩の師走、思わずも鳥取市の柳友加藤貞山氏から三人提携の川柳句集の恵生を受け。思えば貞山氏と私のつながりは雅友故宮地双葉氏を通じてで相当長い年月ではある。宮地双葉、加藤貞山の仲よしコンビは何時でも本社で顔を並べて坐って居たのでも伺えた。私が仁徳陵前庭に句碑建立の際に宮地氏は実行委員長を引受け、入院中でも気を使つて呉れていた。勢い句碑建立の計画も直ぐに鳥取の貞山氏に伝わった。私の方の天笑君や小松園氏、つき子さん一行が山陰句会に出向した際の宴会場で、摩天郎句碑建設費の寄附にと手交された。天笑君は誰でも一口で均等だと云って固辞したが、僕の心だけだと聞かないので持ち帰ったのだと云って詫びて居たが、貞山氏の温い心に感謝しながら返送した事があった。修景施設が遅れて居るので云つても、其の間が長かったので、度々の句碑の催促を受け、いつもその友情に頬が熱くなるのを覚えた。建碑の時には遙か鳥取から豊

生氏と共に姿を見せて呉れて、記念句会や祝賀宴にも列席して、宿泊したらと云つたら大阪に店舗があるので応じて呉れなかつた。こん度の「三人句集」の内、貞山、豊生兩氏のあの時の様子が今なお髣髴としてなつかしまれ、双葉氏も居てたら共に嬉んで呉れるのに……。

貞山氏は、私と違つて実業界に身を挺し、商工会議所議員に歴任、ビル建設等に活躍、鳥取市の大地震・次いで大火に被災の苦難から立ち上り、今は、句碑・句集・金婚の恵まれ三三拍子、羨望の人生と云えよう。なお其上に、柳友に豊生氏、伊藤静枝姉があり、三人トリオの句集刊行は親しさを思わしめて、ほほ笑ましい思いである。

路郎門に、かつて三人句集と銘を打つて句集が上梓された事がある。水客、紫香、潮花の親類トリオ、みな三人三様の路郎門での大いに活躍振りには鳴らしたものだ。しかし、みよと句集や兄弟句集の刊行も中々至難である。命と共に句が亡びる現詩壇に句集刊

行は万丈の気を吐くものだと絶讃したい。何時までも鳥取柳壇に川柳の灯を持ち続けて欲しいと思うのは、蓋し、私独りではあるまい。

加藤貞山句抄

商談にエッチなことも聞いてやり  
孫連れて彼岸遍路の杖を引き  
大阪で稼ぎ故郷で住む余生

大塚豊生句抄

老夫婦ミレーのように土に生き  
復興の家つぎつぎに大火跡  
墓参りいつか夫婦で住むところ

伊藤静枝句抄

勤続の銀盃初春を回される  
地球儀に子のいる距離をたしかめる  
娘に締る帯のたのしみ母のもの

初心者歓迎

(規則書呈上)

たね全部見える

楽しみ子の手品

(静泉)

大阪市南区大宝寺中之町一

誓得寺内

関西奇術教室

TEL (21) 七二二八

・同人吟・

# 秀句鑑賞

—前月号から—

浜田久米雄

また友の計なりすべなき至近彈

山根白星

センチではあるが心打たれる句である。または度々来る友の計報である。生者必滅は世のならわしとは言えいつかは襲いかかって来る運命は如何ともし難いとわかつていても計報という弾が至近弾として身近に迫っていると思えば面白くない人生である。

セールスに向く童顔に生まれつき

森井菁居

セールスマン向きの顔、それは冷たい顔であつてはならずまたきつい顔であつてもいけない。買手を手を安心させ心の紐をほどかせるには顔の造作からして用意しなければなるまい。その意味での童顔は打つつけ顔で商売が繁昌することであろう。

明治の意見を不思議な目で見られ

遠山可住

明治生まれの人間といま頃の若い者とは時

代において可成りの開きがあるようだ。明治に生まれ大正昭和と暮して来た人が昔と今とくらべたら物ずこい変りようである。現代に溶け込めぬ頭の持主の意見は若い人にとつておかしいものであろう。

満員の中でくしゃみが止まらない

都倉求芽

本人には気の毒であるがユーモアのたどつてはいる句、くしゃみも生理現象のひとつではあるが満員という環境には都合が悪い。周囲の人にも迷惑ではあるがくすくす笑いをすする声がかかるようだ。

印鑑を押さねば書類動かない

小谷仙山

未決の書類箱に入れられたままの書類である。責任者の判がすわらねば次へ行くこと出来ぬストップ状態である。書類の採決を一日でも一時間でも早く望んでいるのにお役所はなにをしていることであろう。

溝跳んで少年になる笑い顔

大路美幸

大人の目にはなんでもない溝ではあるが、これを跳ぶことの出来た子供には力試しの溝となる。幼年のころはひと飛びに飛べなかつた溝がやっとひとりで飛ぶことができた。それは幼年から少年になる自信に満ちた跳躍であり会心の笑みを浮かべる子供達の瞳が美しいねたきりの父がやっぱり呉れる

村上旭童

子が父を思う心のいじらしさ、ありがたさが滲み出ている。仕事はしてくれないが相談

事を聞いてくれる父、小さなことまで指図をしてくれる父、子にとつてはかけがえのない父である。もの言わぬ父となつてはじめて知るようではもう遅いのだ。

年金で食つてゐるそんな死んだそな

原独仙

年金受給者の末路を画いてあわれである。年金をもらつて余生を生きている人の噂がそのままつづけば文句は聞かぬが、とうとう死んだそうなる。聞かされては聞かされた方も溜息が出て来る。いつかはそうなるであろう人生ではあるが。

迫力はなし定年をひかえては

野田素身郎

この句も淋しいが定年を目前にしている人の気持のあらわれである。若い時分はばりばり仕事を片付けていたがこうなつて来ると仕事に張り合いがなくなるのである。浮かぬ顔をして出勤する人の靴音は他の若い人のそれにくらべて活気が薄れているに違いない。

おとろえを踏んだベタルに教えられ

原田明春

ひと年とると一年一年と肉体的なおとろえを感じるのであるがこれはやむを得ない。口ではまだ若い者に負けぬと言っているもの自転車に乗つても感じる老人のあわれだ。

其処にいた善見当らぬの農家

河原みのる

農家は年中忙しい。今鎌を研いでいたと思つていたら早どこかへ出かけているような例はいくらでもあるのだから。

・水煙抄・

## 秀句鑑賞

—前月号から—

香川酔々

駐在所一件落着お茶にする

梅本登美也

心からほのぼのとしたものを感じさせる句です。井伏鱒二氏の小品を思い出させます。もちろん、この一件そう重大事件ではありません。例外夫婦喧嘩の仲裁だったかも知れません。村の駐在所の感じですか。どこかで驚が啼いています。

雨だれの一つ一つにあるいのち

大林曲ん手

雨が降りました。軒から雨だれが、ぼん、ぼんんと落ちていきます。その一つ一つが輝やいているのです。あたかも、それがいのちを持っているかのよう。

沈めるもコルクけろりと浮かび来る

高橋古啓

どこかの国の元総理のようでもあります。けろりとしています。いやいや、この句はそうではないようです。わたしたちの仲間のこ

とでしようね。総理ともなれば、コルクのようには軽くはありませんからね。

イソップに今日の私が叱られる

宮尾みのり

イソップに叱られているのは、みのりさんおひとりではありませんから御安心を。わたしなどは始終叱られています。ほんとに楽しい句と思います。

縁起よい夢暮れのうちみてしまひ

柴田恵美子

肝心のときには、さっぱりということがよくあります。「いみじくも」という科白のよくはいったテレビドラマがありました。まさにこの句など、いみじくも言い得て妙ということになるようです。

いいです自作自演の果ての果て

納史葉

女心の切なさかも知れません。史葉さん、自作自演を拜見に上がりますよ。みなさんと御一緒に。拍手をどうぞ。プロデュサーが手を大きくまわっています。

先生の教え守って出世せず

中谷利美

世の中でこんなものですね。落第生よ落胆するな。予備校生よ頑張ろう。先生も生徒のなれの果てです。

稔り田に三食食へにくる雀

池田香珠夫

ほんとに可愛い雀たちです。三食昼寝つきなどと言われると腹も立ちますが、農政不在のお国ですから、せめて稲が稔って余った

ら、雀にたらふく食べさせたいものですね。子宝と言うたどの子も光らない

岸本豊平次

赤い爪叱ることさえあきらめる

渡辺南奉

故里を捨てた子のシャツ着て案山子

岩下照沖

いかがです。親心とはありがたいものですね。古川柳から現代川柳。川柳にうたわれる親心は変らないものようです。

管理職成る程人相まで変り

古野伶人

咳払い一つで会議の流れ変え

市川一峯

口髭を落せずいる元署長

渡辺伊津志

組織の中にくみ込まれて、生活をしなければならぬ社会、そこにいろいろな悲喜劇が生じて来ます。三句とも、ここに焦点をしばって詠いあげました。

大和路の秋を朝朝テレビにて

高山みどり

二十分も電車に乗れば、わたしの住むところからすぐいかるがの里になります。それでも、テレビで大和路の朝を見るのは楽しいものでした。離れた所にすむ人々にはなおさらのことだったと思います。素直に感情のこもった句だと拝見しました。

◇◇のほか、まだ沢山のすばらしい句が残っています。割愛しなければならぬのが心残りです。



# 噫 井上湧三氏

西尾 葉

本社同人、警察病院名誉院長医学博士、井上湧三(柳号)氏の病院葬が、去る昭和五十年十二月二十三日、厳やかに執行されました。茲に謹んで、ご冥福をお祈り致します。

大阪帝国大学医学部、楠本内科の講師をしておられた時代に、たまたま、麻生路郎先生の指導のもとに、昭和六年七月、阪大川柳会が、発会されると同時に、会員となられた、好作家でありました。

非常に旅の匂が、お得意でありました。警察病院長に、なられてからは、ご多忙の為、ご旅行された時には、本社に旅行吟を投句されて、同人欄を賑わされていました。ここに遺句を抜粋して、ありし日の氏の影響を、お偲び致し度いと思ひます。

## 湧三抄

伯林の夜を君黙々と歩く気か  
ヨーロッパ渡り歩いたように  
捕まえるように容態聞きにくる  
尋ね人浴衣のままと書いてある  
大阪も広いに路次の奥に住む  
医者だけに任しておけぬ焦燥さ  
気の毒にギブスベットの詩人です  
刺りあとは青しペロアがよくうつり

卵でも召されと上目つかわれる  
彼は酔い吾は解く聞いてゐた  
酒煙草やめて余生をどうする気  
薄水を踏むたわむれもあってよし  
尚、私の家に、大切に蔵われていたもの  
短冊があります、それは私が結婚した時に戴  
いたものであります。  
ホネムーン別府へ渡る波の音  
湧三  
謹んで、ご冥福をお祈り申し上げます。合掌

## 湧三博士を悼む

市場 没食子

大阪警察病院長だった、井上湧三先生が急逝された由、一三夫氏より葉書をもらい驚いて知る。知らせてもらえば御会葬に行ったのに、それにしてもあの健康で体軀の整ったお方がと、思うと人間の寿命の果敢なきが、しみ

みじみと感じます。追悼文を書けという命だが、他に適當な人が随分ある筈だけれど、命ぜられるままに、ただたどしいペンを持つことにした。

先生は陳い阪大川柳会のメンバーであったが御多忙の故で、出席率は少なかつたようである。然し警察病院の川柳会には、会長として、殆んどが出席されている。同病院には八竹正柳(当時内科部長)先生もおられて中々盛大で、私の知人も二、三名加入していった。解散時に出示された句集の名が思い出せない。柳人としての先生の句は多いとは言えなかつた。詩趣が湧くと、どんどん作句せられるが、間は雑誌に目を通されるのもやつこらさであると同様から承った、私もそう思う。

先生とは長い間お互に、雅号も知り顔も知り合つた仲だったが、ついで言葉交わす時がなかつた。私が川雑の編集部に名を連ねてた頃所用で先生を訪ねたが、直ぐ会つて下さつたし、帰りは君も今度乗転して行くらしいがしつかりやれよ。と親しく激励して下さつた。今もうれしく思っている。以後は時々お会いしたが入院を頼む用事ばかりで、申訳けなかつた。いつも用件がすめば中々帰して下さらず、川柳の話に花が咲いて長い時間御邪魔していた。思うに先生は川柳愛好者であるが、表面へ出ての活躍はお好きでなかつたように思う。たまたま、川柳関係者にお会いになると、なつかしくて柳界のことや、知人川柳家の様子を聞きたがられたようだ。

先生も、診察場風景の句は、有名で、かつて路部先生も、警察病院の句会で、も例に出された参考句として示された。限りある紙数が来た。先生は大阪生れ、大正十二年の阪大卒で、享年七十七才、惜しい人を逝かした嗚呼。

追悼句  
本當の川柳好きがひとり減り  
遺句  
松の内甘える人もいてうれし  
撫肩は淋し解けてく水に似

診察場風景(病院風景)  
そうと聞き田舎へ行こかたとずね

没食子



## 悼 池田古心氏

本田 恵 二 朗

一寸ない病氣と聞かせ庸医なり  
温泉の効能笑いながら聞き  
乳母車押して夫人は絵にされる  
熱り戻す話の窓へ雪が降る  
墨痕淋漓三人もいて読めませぬ  
墨年期修理の時が来ましたよ  
襟足の黒子に痴人夢多く

鏡野川柳社主宰、川柳塔社同人(本社参事)そして温厚という語の見本のような柳友古心氏が、五十年十一月二十九日他界されたことを聞いて、私は一時驚きと悲しみの沼に突き落された思いであった。思えば長い柳縁の年月であったが、会うたびに満面の笑みを惜しみなくくれたその笑顔が現世から消えたと思うと寂しさを禁じ得ない。  
岡山県北の苫田郡鏡野町の旧家に生れ、伝来の農を継ぎ、郷土の爲めに尽すことをいとわず、人望を一身に集めて、豊かな人生を築き上げた彼である。全くの川柳未開の地に、川柳種を蒔き、熱心に育て、芽吹かせ、遂に花を咲かせた彼の情熱は高く評価せねばならぬ。山陽新聞柳壇で、その選者であった故麻生路郎先生を知り、川柳雑誌を知り、その同人に席を置くに至った。

故服部十九平の句風に魅せられて、彼を指導者に仰ぎ、昭和二十七年四月に『川柳かがみ』を発行し、堅実な努力を続けて来た。三十七年一月機関誌百号に達するや、町教育委員会から町の文化に寄与したゆえをもつて表彰を受けた。  
四十三年には十九平推選句集『銀筋』を発行して、鏡野川柳社の存在をいよいよ強固なものにした功績は大きい。柳友の和を保ちながら川柳街道を淡々として歩き続ける古心の姿は謙虚であり無欲の姿とも眺める私であった。惜しい人を悼む心は切である。  
柳星となつて古心は天かける——  
謹んで冥福を祈り、この一句を捧げる。  
尚彼の遺句のほんの一片を掲げて、在りし日の古心を偲ぶ。

古 心 抄

妄想の声で九十四の母病める  
まぼろしを追い一つつ萎び果てんとす  
地獄から迎えが来ぬよう数珠をもみ  
九十五才母ミイラ化し息を止め  
生きるいう権利に懊惱つきまとい  
働けど働けど啄木と同じ運  
あやまちがあり人生の面白さ  
出たとこ勝負無難に老いにけり  
寝ておれと医者は言うけど農繁期

曇らぬ「かぐみ」

不二田 一三夫

池田古心氏がかねてから入院療養中とは知っていたが、まさかこんなに早く悲報に接しるとは夢、思ってもいなかったことである。  
明治三十八年生まれだそうだから七十歳だった。機関誌「川柳かぐみ」は十一月号で第二五九号になる。偉大なる遺産である。  
本名は「志」。『まもる』と読まずのさうだが、それを上と下にはなし、雅号を「古心」としたというところである。  
機関誌を見拜すると女性が多く、それも老人が多いようで、月例会はほとんど古心居となつていて、楽しいついでのようにおもえた。いつだったか、古心氏の便りに、  
「自転車で山を越えて出席する人もいる」  
それで、ぼくらのように高架線や地下鉄を利用して行く者には想像もつかぬことである。  
若柳潮花氏がかつて「川柳」時代、婦人友の会を指導しておられたが、その会員には鏡野の人が多かった。現在もそのころ活躍していた人が健吟を吐いておられる。

婚 礼

小林由多香選

婚礼に高張り点す旧庄屋 一風  
 婚約の娘式場も決めてくる 貞祐  
 婚礼を早めるわけは喋らない 登美也  
 国鉄のストで婚礼日を延ばし 松花  
 格式を言わぬ都会で婚礼し 国彦  
 長男の婚礼過疎の村でさせ 伶人  
 婚礼の祝詞ふたりの過去に触れ 代仕男  
 末っ娘が嫁いだ朝の陽を拝み のぼる  
 婚礼の一夜明るくなつた過疎 可住  
 婚礼の余勢車内の黒田節 本蔭棒  
 婚礼が間近で無口になつた父 道子  
 純白に包んで惜しい娘を嫁かせ どんたく  
 婚礼が近く素直な娘にもどり 右近  
 婚礼がせぬ駆け落ちが添い遂げる 一郎  
 婚礼もせぬ駆け落ちが添い遂げる 一郎  
 婚礼の借り着は少し派手にする 茶人  
 婚礼のめでたくめでたくハネムーン バット  
 婚礼の晩から無口な母になり 善彦  
 婚礼の荷に逢い大安と気付く 思月  
 婚礼のその日まで他人です 綾女  
 春日

反対も蔭の力で華燭を得 静枝  
 婚礼の招待状にある重み 秀峰  
 婚礼が近づき我儘聞いてやり 秀峰  
 婚礼が決って娘らしゅうなり 道子  
 親の過去秘めて婚礼派手になり 優  
 御教祖の前で婚礼はつび着る 祥月  
 会費制婚礼親戚まごつかせ バット  
 私の顔でない婚礼の灯がまぶし いわを  
 ハネムーン送りゆっくり飲み直す 落猿  
 嫁にやる娘を座椅子の眼がうるむ 芳子  
 晩酌へ黙し嫁がす日は近い 芳子  
 スピーチを暗記してきた被露宴 カズエ  
 婚礼の老妻にまだある若さ 暁童  
 虚脱感覚え婚礼から戻り 保子  
 婚礼も葬儀も同じ社がしきり 豊生  
 婚礼の日取り大安繰って見る 悠泉  
 婚礼の荷物そんな娘があつたのか 木魚  
 婚礼を明日に明るい家庭の灯 七面山  
 婚礼にやつと間にあう夜なべの灯 柳子  
 婚礼を終えて空虚な茶をすすり 洋々  
 ぎこちない仲人それで無事に済み 紫宏  
 婚礼というシーズン陣を張り 千翁

婚礼の幸せも縫う賃仕事 潮音  
 婚礼の日はにかみを見てもらい 千翁  
 伴せな鯛婚礼の膳に乗り 芳子  
 仲人をひきうけ挙式の曆繰る 軸

寒 波

小林孤呂二選

はやり風邪寒波にのつてやってくる 芳子  
 若役と言うて寒波を走らされ 昌道  
 白い息吐いて寒波の停留所 国彦  
 寝たきりの母へ寒波の見舞書く 道子  
 招かざる寒波不況へ輪をかける 軒太楼  
 日雇いの暮し寒波に負けられず 優  
 あるもので寒波を凌ぐ物価高 カズエ  
 タツタツタ新聞少年寒波突き 善彦  
 網仕事寒波の海がしけ続く 潮音  
 寒波待ちかねていたフグの味 翁童  
 寒波来る事を知らせるリユーマチス 一風  
 寒波まで不況日本を包み込み 思月

小走りの下駄も寒波の音で鳴り  
 寒波来て雪を相手に腹が減り  
 老人をまびいて持って行く寒波  
 みの虫のみのへ寒波はつきあたり  
 寒がり家が籠っている寒波  
 三度ほど寒波が欲しいのりの網  
 社会鍋寒波の中で温かい  
 温室で咲いて寒波へ縮こまり  
 汽車止めた寒波ストほどにくまれ  
 燈台の灯も消しそうに吹く寒波  
 合宿の成果へ寒波待ち遠し  
 雪乞いの祭もあって寒波まち  
 漬物がうまい寒波の凍みる夜  
 老いの身の耳が寒波にちぎれそう  
 手はじめの寒波まっすぐ富士へ来る  
 繁昌を喜ぶ人もある寒波  
 三寒が恐い四温の日向ぼこ  
 道はばむ寒波は山の宿出さず  
 カニすきの便り本格的寒波  
 野良犬の身に耐えるほかない寒波

佳

予約券丁度寒波の日に当り  
 寒波寒波貧乏人を苦しめる  
 夢を追う列へ寒波は容赦せず  
 募金する声を盗んで行く寒波  
 容赦なく寒波施設の戸をなぐる

人

災害の救助法まで出る寒波

本蔭樺 魚山 山 芳仙 南二 肖奉 里風 重人 無人 木魚 代仕男 みのる いわを 七面山 可住 不二 どんたく 貞祐 可住 道夫

定年が近くとりわけ寒波凍む 素身郎  
 地 天 この寒波神のお怒りかも知れず 柳子  
 軸 寒波きて立往生をする峠

閏年

浜野奇童選

閏年何か起きそうとは易者 暁明  
 几帳面な家主の不满閏年 琲珈里  
 閏年の一日にある運不運 軒太楼  
 閏年手形一日生き延びる 軒太楼  
 閏年の仲間はすれの日に生まれ 可住  
 閏年も定期の利息同じこと 宵明  
 二月二十九日生死のリズム変らない 武雄  
 ほんとうの誕生日の来る閏年 柳五郎  
 閏年一日儲けた気で遊び 伶人  
 下萌の遅い今年は閏年 松花  
 大雪が降ったも閏のせいにする 一郎  
 働く身へ一日多い閏年 季贊  
 四年目のやりくりという閏年 千翁  
 閏年ですよと妻に教えられ 七面山

儲かった様にも見える閏年 漫柳  
 給料が一日伸びた閏年 祥月  
 閏年出生届けに父迷い 紫宏  
 閏年一日遅れて春がくる 素身郎  
 四年目に一度はみ出た日に生まれ 右近  
 お日様に借りを返えした閏年 本蔭樺  
 色町へ一日のびたいやな月 どんたく  
 閏年いち日あぶれる日が増えた 芳子  
 予定日が一狂う閏年 芳仙  
 三六六日雲の流れは変わらない 実  
 閏年オリンピックはどこかいな 芳仙  
 旧暦の閏でダブった宵祭 昌道  
 閏年日歩計算がもめている 千翁  
 太陽に文句があつて閏にする 宵明  
 閏年もあつて地球がまわつて 幸  
 借りた利子閏もチャンと入れてあり 紫宏

佳

一日を儲けて手形割引かれ 落猿  
 参詣の殊更多き閏年 一郎  
 日稼ぎにおまけがついた閏年 代仕男  
 閏年借りが一日延びた朝 洛醉  
 閏年一日悲しい日が増える 道夫

人

閏年家計簿ちよつとだけ狂い 保夫  
 閏年やつとばくにも誕生日 代仕男  
 天 閏年地球は春を急かさない 可住

# 初歩教室

題「帯」

本田恵二朗

当教室を担当してまる七年を経過した。毎月無欠で皆さんの句と対話し続けたことを幸せに思っている。其間に当教室にタツチされた柳友の数は二二〇名となつた。私の名簿に整然とお名前が記録されている。現在川柳界を堂々と闊歩されているお名前も見受けられて嬉しく思つたり、活躍を祈つたりする私である。第八年目のスタートも目捷にある。皆さんも私も共に張り切つてスタートしたい。そして皆んなよき川柳人になつて頂きたい。

嫁の手を借り仲人への帯をしめ  
 (仲人への帯 嫁の手を借りてしめ) 静子  
 成人式帯の値ぶみを競い合い  
 ますえ  
 片腕で黒帯取つたローテーション  
 つね  
 (黒帯を隻手で取つたど根性)  
 秀村  
 御婦人の着物に帯の晴姿  
 (晴姿帯は役目を知っている)  
 晴姿帯がひととき引き立てる  
 繁子  
 (蝶結び晴れの姿を引き立てる)

和服着て旅の疲れと帯づつかれ

同

(久方の和服の旅の帯疲れ)

紀美代

帯しめてちよつと言葉も変えてみる

同

(袋帯しめて言葉もあらたまり)

道子

帯解けば急に茶漬が欲しくなり

同

帯きゅつとしまめてためらいふつ切れる

慶彦

(ためらいを捨てよう帯をきゅつとしめ)

同

三十を妻帯もせず腰かじり

同

(妻帯もせず三十の腰かじり)

同

眼帯で来た銀行で気がとがめ

同

眼帯の訳は昨夜の酔虎伝

同

帯結ぶ妻片脚で紐を取り

同

帯より短かい帯で奇しき縁

同

初孫の安産祈り帯贈る

同

(腹帯に込める初孫待つところ)

同

帯しめれば皆しとやかな顔となる

同

(帯をしめると茶目っ娘の顔でなし)

同

(お転婆が帯でしめあげられている)

同

角かくし胸の鼓動を帯で止め

同

(角かくし胸のときめき帯でしめ)

同

くつろぎの着替えの帯へ猫がじゃれ

同

くつろぎの帯と知つて猫がじゃれ

同

くたぶれてくたぶれて喪の帯を解き

同

(喪の帯を解いてベッタリ入り込み)

同

せつなさを帯のきつさと言うておく

同

乱取りや娘二十才の黒帯も

同

(乱取りや娘十九の黒い帯)

同

帯結ぶ女になんと紐の数

同

(帯一本結ぶになんと紐の数)

同

スタイルはどこかへ忘れ岩田帯

同

(スタイルは言うておれない岩田帯)

同

帯解いてマダム自分の顔をつけ

同

(帯解いてマダムは母の顔になり)

同

帯しても伸びない腰さの腰

同

(帯しても伸びない腰さの腰)

同

あの時に四糸を撰つた好きな帯

同

(あの時に四糸を撰つた好きな帯)

同

野立会美しい帯しめてくる

同

(もみぢ敷く野立の席に競う帯)

同

七五三可愛い帯の鈴が鳴る

同

(帯の鈴すくすく育ち音で鳴る)  
 帯ボンと叩いて老妓すつと立ち  
 (帯ボンと叩いて老妓衰えず)  
 (帯ボンと叩く仕草も芸の内)  
 白帯がコロリコロリとよく転び  
 (白帯の根性ころりでもころんでも)  
 美しく生きる心の帯しめる  
 三代に支えて健在つづれ帯  
 娘の帯をしても母は満ち足りる  
 (娘の帯をしめる伴せ母のもの)  
 (娘の帯をいそいそしめる母である)  
 帯きゅつとしてめで女が出来上り  
 胎動の帯に母の座自覚する  
 (岩田帯しめて母の座たしかめる)  
 夕映えの汐路紫紺の帯を描く)

雅号ぶつちやけばなし

ずしよう



宮川珠笑

みやがわ

(147)

内容に関しては妻に時効になっている  
 古日記に漫画やコントを投稿してはその  
 稿料プラス給料で飲み歩き外泊を重ねて  
 いた毎日がつづられています。その頃梅田の旭屋で手  
 にした川柳雑誌が私に川柳を教えてくれました。中で  
 も豆秋先生の句に共鳴し暗記しました。さて三十三年  
 の誕生日にこうつづっています。『会社の仕事も多忙  
 だ、今日からは川柳を勉強することによって人生を有  
 意義に生きよう、そしてコントや漫画にはない笑いを  
 追求しよう』こんな思いがあがった考えから名づけたの  
 が珠笑です。かって古方先生がお書きになっていた川  
 柳の笑いの六段階を一段一段精進して初志を貫くべく  
 努力しております。

保夫	昭治	幸	同	サヨ	洛醉	同	露杖
帯を解く悔いなき心たしかめる 襦子の帯亡母のものなり羽織下 (亡き母の音で鳴るなり襦子の帯) 成人を待たずはなやぐ初春の帯 赤沙の帯をみつめる漁民の目 (漁夫の目へ赤沙の帯うらめしく) 帯しめた味ボンと音に変え (帯しめた味をボンと音にする) 帯一本買ってやれないふがいなさ あの虹は妖精の帯かもしれず (妖精の帯かもしれず虹映える) 岩田帯祝うてくれる母は亡く (三人目の腹帯くれる母や亡し) ときほぐす帯へ託したある予感 (ときほぐす帯へ予感の手が震え) 出陣もかくやと思おう帯をしめ	同	静枝	同	翁童	頼次	静泉	大成
伊津志	同	寿子	同	同	同	同	同

(帯しめていざ出陣というお顔)  
 招かれてトイレでそつと帯ゆるめ  
 (招宴の帯をトイレでちとゆるめ)  
 帯の中間円と隠してあたり  
 (重宝な帯だなど聖徳太子思い)  
 仲人口短い帯をのぼして来  
 (仲人の舌がほどよく帯のぼす)  
 ポンボンと叩いて帯がしめ上り  
 (ボンボンと叩けば帯が喋り出す)  
 嫁姑と仲良く帯を結び合う  
 (帯結び結ばれ姑とうまが合い)  
 岩田帯男子願いに神詣  
 (こんどこそ男児産みたい岩田帯)  
 あす見合い派手だ地味だと帯でもめ  
 (帯の彩あすの見合へもめて)  
 帯揚げのあか過ぎて衰れにも見え  
 (帯揚げの紅があわれを誘う齡)  
 (帯揚げの紅が年増へわびし過ぎ)  
 兵児帯の経験もなく古稀近し  
 (古稀近し兵児帯の味知らぬまき)  
 岩田帯巻いて退ぞくことがない  
 (岩田帯母性の強さを知っている)  
 瀬戸内に流してならぬ黒い帯  
 (黒い帯もう流すまい瀬戸の海)  
 帯結ぶ手順教えて春祝う  
 (帯結ぶ手順教えるほど育ち)  
 (帯結ぶ手順教えて初春を待つ)

藤持  
日日子  
柳五郎  
同  
鐘堂  
岳麓  
忠吾良  
洋子  
正則  
雁行  
同  
茂美

題—愛—二月二十日締切(四月号発表)  
 宛先 倉敷市下津井一—九—三四七—一  
 本田意二朗

大萬川柳

「酔う」

入選発表

選者 川村好郎  
投句総数 五百九十五句  
入選 七十五句

酔うほどに夫可愛い赤ん坊

大阪 あいき

見渡して熱弁自分に酔うている

大阪 頂留子

酔いさめて悔いだけ残る日の空虚

大阪 好一

酔客へママほめかすものを持ち

尼崎 喜甲

ほろ酔いに朧の月があとをつけ

羽鳥 静枝

酔うていて財布の紐はゆるめない

兵庫 可住

ささやかな俸せ晩酌で酔うている

岡山 翁童

酔うと出る軍歌に青春詰めてある

東大阪 清人

終電に間に合い酔いが乗りすぎ

泉北 春栄

正月の酔いを計報が打ち砕き

鳥取 洋々

酒に酔う父の苦悩が解りかけ

堺 一二三

負け犬の愚痴が屋台で酔うている

倉敷 梁水

恋に酔う目は遠くに遊んでる

大阪 弘生

性懲りもなく甘言に酔うている

神戸 静泉

指切りの甘さに酔うている二人

堺 千乃子

バスに酔い電車で酔うて母が来る

堺 憲祐

勘定は酔うてない目でたしかめる

岡山 健二

飲まぬ時言うてほしいと逃げられる

和歌山 幸

酔うていたなどと男のいやな嘘

熊本 芳仙

何もかも忘れ素直に酔ってみる

鳥取 紫宏

早く酔うて夫に老いの影をみる

倉敷 素身郎

女房がなんだと酒の力借り

笠岡 忠三

酔うていた払いを朝寝してたどり

寝屋川 小路

ムードには弱い私が先に酔い

名古屋 曲ん手

酔うたふりその責任へ背を向ける

倉敷 里風

精一杯働き除夜の鐘と酔い

佐賀 照沖

女の枷捨ててる気グラス琥珀色

大洲 みのり

父の酔いそろそろ徐洲徐洲が出

東大阪 三十四

孝行のつもり母が人に酔い

岸和田 操子

明日節酒あさって禁酒今日を飲む

大阪 貞祐

人形と知りつつ文楽の芸に酔い

大阪 誓二

朗報しきりいつもの量はとうに越

大阪 誓二

酔うた目に妻が一番美しい

奈良 都詩

あすの鋭気養うはずが二日酔

テイーン エージャー 歌より顔に酔

うてている

宝塚 静馬

肩を貸す方もあぶない千鳥足

東大阪 美子

酔いざめの水もむなし独り者

倉敷 筒子

会心の出来です自作に酔うている

倉敷 筒子

ほどほどに酔えて正月らしくなり

藤井幸 吸江

酔うてよし酔わんでもよいおつき

堺 ひろ子

申し訳けなくも法事の酒に酔い

西宮 多久志

酔えば出るさんざお金を捨てた喉

大洲 暁明

そこはかの酔いに安らぐ老父である

堺 天笑

忘れたいつもりの酔いが冴えてく

松原 サヨ

まことよし嘘よしどうせ酒の上

神戶 牧人

仲人もめでたく酔うて日が決まり

神戶 牧人

酔眼に冬の星座が華麗なり

神戶 牧人

舞扇の先がほんのり酔うている

神戶 牧人

思いきり酔うて縋ってみたい人

神戶 牧人

うかつにも酔うて腹底さぐられる

神戶 牧人

妻と酔う銀婚の日の夜が静か

神戶 牧人

メロディーに酔うて彼氏を忘れか

神戶 牧人

悪酔いを下戸に任せて飲み直し

神戶 牧人

これしきの酒に酔うかと目がすわ

神戶 牧人

和歌山 道夫

青空に酔う少年の臆がきれい  
眉をひく女鏡に酔うている  
先生が酔うと人間らしくなる

八尾 美幸

佳句  
平静を装い酔うている敗者

大阪 好一

晩酌の酔いに働く明日がある

神戸 牧人

ライバルの祝宴苦い酒で酔い

岡山 翁童

生きていてよかった同期が酔う今

宮 松原 重人

女ひと時ファッションショウに酔

優勝に酔うて初心がしびれ出し

西宮 多久志

ペロペロに酔っても終電乗っている

大阪 蘭

人ノ句  
自我に酔う足が歩道を踏みはずし

西宮 百酒

地ノ句  
これ以上酔えぬ立場を抱いている

富田 花梢

天ノ句  
労わり的一本だからまろく酔い

和歌山 幸

暁者 吟

陶酔から醒めて拍手が鳴りやまず

昭和五十一年度

ベストテン (二月現在)

一	幸	五、〇	和歌山
二	牧人	四、五	神戸
三	百酒	三、五	西宮
四	多久志	三、五	西宮
五	美幸	三、〇	八尾
六	道夫	三、〇	和歌山
七	花梢	三、〇	富田
八	翁童	二、五	岡山
九	好一	二、五	大阪
一〇	利美	二、〇	尼崎
一一	英詩	二、〇	兵庫
一二	サヨ	二、〇	松原
一三	天笑	二、〇	堺

一四 暁明

一五 ひろ子

一六 吸江

一七 筒子

一八 静馬

一九 都子

二〇 誓二

二一 蘭

二二 重人

二三 重人

昭和三十二年 第三回

「ムード」

五句以内

締切 二月二十五日

第四回

「枝」

五句以内

締切 三月二十五日

干 593 堺市堀上緑町一ノ三

ノ七 藤井一三三方

大萬川柳係

第23回 大萬川柳大会

日時 昭和五十一年二月十五日

(日) 午後一時

以下略

会場 大萬

詳細は川柳塔一月号誌上をご覧ください。

### 一分間の柳論

若林草右

朝顔の蔓は左まきときままっている。左下かい。重力に抗して垂直に伸びることが、むつら右上へと巻きつく。しかし透視の眼で見れば、裏側では、右下から左上へと伸びて右巻きとなる。下からみると時計の針の方向で、上から見ると反対になると、同一の現象である。その見方、立場をかえると、全く反対の表現となる。ある素材を句にするときも、視角を変えることによって、意外な、新しい境地を拓くことができるのでなかろうか。

蔓が伸びてくると、空中游泳して支柱を求め、水平游泳は垂直游泳よりも範囲は広みてこんなことを考えている。

感謝 売切れ

垂井葵水遺句集

(好郎)

# 柳界展望

(原稿締切毎月末)

敏・一三夫諸氏がかが参列した。(同月28日には薫風編集長が本社を代表して弔問にかけつた。)なお29日の各紙朝刊に氏の逝去が報ぜられた。

▼川柳研究社が51年1月1日から発行所移転。〒183 東京都府中市新町2-47-26(渡辺運夫方) 電話 04-23-63-7835-4。振替東京四一五六三七一。なお一月四日に新幹事長が推挙されると。

▼時の川柳12月号。三条東洋樹選「俗雅集」は東洋樹主幹が辞退、後任は新葉美野路氏。

▼池口呑歩氏(川柳年鑑編集委員)から一前向きの御社には驚きました。本社会で現代川柳の方々を選ばれるのですね。東京では考えられないことです。

▼川柳紋子12月臨時増刊号は「福島鉄児遺句集」。序は浜野奇童氏(弓削川柳社会長)。本社から生々庵主幹、与呂志、一三夫、葉子日満、文庫、恵二朗、栗、奇童諸氏執筆、見事な編集

▼麻生霞乃先生はこの二月二十四日で満八十三歳になられるがますますのご健勝である。旧ろう某日、大坂形水氏や橋高薫風氏が、または山川阿茶さんが生駒を訪問された。

は各方面で好評。  
▼川柳かみ11月号259号に故池田古吉氏の追悼記事がある。さびしいですな  
▼鈴木可香氏(名古屋市)は和歌の浦のニュー観潮ホテルから一石段の数ありがたい紀三井寺可香。  
▼汐風川柳社(今治市)か忘年会の寄せ書拝受。本誌購読者諸氏の雅号がなつかしい。

## ▽同人の動向△

▼若本多久志氏と不二田一三夫氏は主幹ご夫妻の句画集「生々楽天」の原稿整理ほか再三令息医博宅で会合句画集の完成へ協力されている。

▼羽原静歩氏(守口市)の長女良美さんは秋田宗男氏と1月18日に守口市民会館で華燭の典を挙げられた。  
▼水粉千翁編集「川柳道場二三五号」は51年新春作品合同互選「かぎ」を発表。本社から久米雄、好郎、薫風、栗、生々庵、恵二朗諸氏が選者となり、十傑作品に小野克枝さん(倉敷市同人)の「鍵を持たされて疑

い深くなる」が選ばれた。  
▼三人句集「伊藤静枝・大塚豊生(同人)加藤貞山(同人)P218(非売品)は本号で八木摩太郎氏の紹介記事を参照。

▼山内静水氏(竹原市)の川柳たけはらの会員、今川光子さんは書家で、絵画は玉青先生の尾道教室へ入門されています。また12月18日のNHK木曜ファミリィに山口、広島、岡山から柳人が出演。その中に竹原から著居、そのみ、小学三年生の愛ちゃんの皆さんも出

い深くなる」が選ばれた。  
▼三人句集「伊藤静枝・大塚豊生(同人)加藤貞山(同人)P218(非売品)は本号で八木摩太郎氏の紹介記事を参照。

# 花 公 栄 社

富田林市富田林町24-4  
TEL 07212③2064

## 大会川柳記念

日時 昭和51年4月25日(日) 受付10時  
場所 岡山市吉備津 吉備津神社  
除幕式 吉備津神社内撰社字賀神社(10時30分〜11時30分) 岡山駅から国鉄吉備線に乗り、吉備津駅下車(所要時間15分) 徒歩五分。または岡山駅前中鉄バスで約25分、吉備津神社前下車 徒歩4分。  
記念川柳大会 吉備津神社内  
兼題 (当日出席者のみの持ち寄りとする)  
八重桜 番 傘 榎 本 聡 夢選  
散る川柳塔 中島生々庵選

演された。

▼ハワイと川柳塔を結ぶ若本多久志団長、西尾栄副団長の一行四十氏は1月20日午後5時半大阪空港、6時羽田から飛翔。この見送りには生々庵主幹が大阪空港まで行かれた。(詳細は三月号に発表。)

▼山田季賀氏(高槻市)は1月中旬再手術されるそうだが、故春果氏の告別式へ病院から参列された。

▼旅信△

▼嘉数千代香さん(岡山県)は北海道へ柳友二人で女キジキタの旅行をされ「さっぽろ川柳社」主幹、齋藤大雄氏に迎えられ市内見学などでお世話になりましたと  
▼藤村メ女さん(西宮市)は三島から「真白な富士へ心も洗われる」メ女。

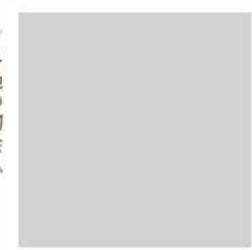
▼謹悼△

▼井上湧三氏(大阪市同人・元警察病院長)50年12月13日に逝去。25日の病院葬には生々庵主幹が参列された。(明治31年3月14日生)  
▼池田古心氏(岡山県・かみ川柳社主宰)は11月29

日病院で逝去。七十歳。

▼追悼文別項参照

▼大江秋月氏(兵庫県)の尊父が八十歳のご高齢で11月26日急逝された。どこかに父が戻りそうで部屋をあけてみる。秋月。謹悼  
▼児島与呂志氏(藤井寺市)の母堂九十歳が12月19日逝去。告別式には葉・美幸・鬼遊・酔々・夕花・儀一・あいき・君子・智子・敏諸氏が参列された。十二月の雨しとど降る骨を抱く。与呂志。謹悼。



▼各地の句会△

▼南海川柳会は2月19日6時から南海電鉄本社食堂内で開催。題は「単刀直入・主役・飾り」。  
▼南大阪川柳会は2月20日6時から大萬で開催。題は

「しゅれ・挫折・練る・宝

川柳東大阪は2月28日6

時から東大阪市中央公民館

2F第二集會室で開催。題

は「荒れる・暗号・視野・

Uターン。席題二題。

▼第13回三重川柳大会が2

月8日10時から津市新町一

津津會館一階広間で開催。

題「ランブ・運ぶ・天・ま

んなか(各2句)他に雑詠

3句は不二也選。投句料は

無料。1月25日必着。大会

事務局〒516伊勢市八日

市場町4-2橋本征一路方

▼菜の花句会二月十日(火)

夕六時から西郷會館(八尾

神社境内)近鉄大阪線八尾

下車南歩約一分。題は「相

手・鬼・赤電話・舞う。席

題は二題(各題五句以内)

投句は適当な句箋に各一句

毎記入、裏面に雅号記名

郵券百円同封のこと。投句

先〒581八尾市高安町北

一丁目二五―大路美幸宛。

なお三月句会は10日夜。題

は一穴・都・頭・支える。  
▼大萬川柳大会は2月15日

午後一時から(詳細は前号

参照)

並幕除碑句会

男	ふあうすと	田中好啓選
迎える	時の川柳	三条東洋樹選
松	平安	福永清造選
鬼	川柳展望	時実新子選
弓	津山番傘	杉山方夫選

投句締切 正午(各題一句ずつ)  
祝吟 一句  
会費 一〇〇〇円(昼食を含む)準備の都合もあり出席予定者は4月10日までにハガキでお知らせください。  
申込先 川柳岡山社  
主催 風来子句碑建設委員会・川柳岡山社

夢が広がるシヨッピング  
近鉄がお届けします



アノ近鉄 TEL 671-1231



上本町近鉄 TEL 779-1231



奈良近鉄 TEL 33-1111

アノ本町良上奈



# 本社新春句会

会場 文化会館

七日 午後六時

新しい川柳塔社旗が二本、新春の句会場の雰囲気を盛り上げていた。あいさつに立たれた生々庵主幹の力強く生き抜くための生命力の尊さを強調され、ハワイ吟行団40名が川柳の種を蒔きに大成功は灯を見るより明らかであると結ばれた。

柳話是好郎氏といわれるだけに一言半句がそのまま川柳のエキスとなる有益なお話だった。

全出席者29名、二十三年間連続出席の傍島静馬氏を筆頭に賞状と主幹染筆の色紙が贈られ、月間賞杯永久保持者定金冬二氏ともども会場から拍手が渦巻く中に授賞式がおわる。短冊交換は瓢太氏の手ざわよくされ正月句会は花やかに進んでいく。

今月の竜王は中川滋雀氏ときまり、輝く月間賞杯が氏の手におさまった。――岳人記

(進行・西田柳宏子―記録・高杉鬼遊)

出席・敏・与呂志・天笑・笛生・千万子・維久子・喜美子・薫風・蘭・多久志・静歩・滋津・太茂津・柳志・重人・正彰・勝晴・儀一・メ女・凡九郎・川狂子・瓢太・悦郎・右

近・寿美子・古啓・肖二・綾女・生々庵・誓二・冬二・柳宏子・いわを・古方・葛城・あいき・形水・好一・千梢・鶴声・美幸・岳人・弥生・醉升・栞・幸生・伸生・百酒・恵美子・鬼遊・鎮彦・醉々・吸江・千世子・度・一舟・牧人・夕花・好郎・小松園・一二三・庸佑・雀踊子・静馬・頂留子・美房・漫柳・葉子

## 席題「好調」

傍島 静馬選

好調な出足に神社のえびす顔 誓二  
新築をして好調に翳がさし 冬二  
好調に溺れていつか砂を噛み 正彰  
好調の友から元氣出せと 言う 醉升  
好調の陰にかくれている内助 重人  
好調の初春に雪など欲しく ない 恵美子  
スランブと好調はなし 食い 違い 儀一  
好調のタックル抜けて トライ する 敏  
好調が続いて祈り忘れそう 夕花  
好調な企業へ銀行貸した がり 好一  
好調な時は 仲人 忘れられ 好一  
ほとんど調子近所のきつ い 眼を 感じ 小松園  
好調に水かけられた王手 飛車 幸生  
好調に事が運んだ物足ら ず 葛城  
好調に進む二人へ親が 折れ あいき  
正月の夫婦喧嘩に勝つ 好調 岳人  
好調の男おしゃべり止まら ない 弥生  
好調なだけに一投惜しまれ 庸佑  
好調で今年もゆける目ど き 醉升  
出足好調目玉商品ばかり 売れ 鬼遊  
ライバルも好調らしいフア イト 湧く 柳宏子

## 席題「年賀ハガキ」

小浜 牧人選

年賀状お達者らしい文字 が 跳ね 柳志  
去る者も年賀ハガキで 追い 続け 太茂津  
一票が年賀はがきに 匂う て 来る 重人  
生きている証拠の年賀は がき 着く 庸佑  
籤のない年賀は別の箱に 入れ 小松園  
嫁が来てきれいな年賀ハ ガキ 増え 寿美子  
また心入れ替え年賀の 文字 と する 凡九郎  
筆太の賀状病み上りとは 見え ず 千梢  
教子の賀状は今も拙い 文字 一  
年賀ハガキ不運の友の 字 が 細い 吸江  
年賀ハガキ貸した金には 触れ て はず 好郎  
相変わらずと書く 伴せ な 年賀 状 柳志  
生活のゆとりが見える 年賀 状 天笑  
年賀ハガキより先に 来 て いて 酔っ てる 吸江  
幼な妻姑かせる年賀ハ ガキ も 来 右近  
松過ぎの年賀ハガキが て れ て いる 静馬  
筆で書く年賀はがきの 稚拙 よし 馬

寝正月柳友の賀状に起こされる 柳志  
 であらぬなよつてもきつちり賀状くる 勝晴  
 かくした一枚賀状にまじつて 寿美子  
 年賀状を千枚書いて男死ぬ 冬二  
 年賀ハガキの中に見事な異がある 恵美子  
 それと無し年賀ハガキで探つて見 右近  
 年賀ハガキ来るたび孫の名がふえる 喜美子  
 今年から姓が変わつて来た年賀 好一  
 離婚した妻にも年賀ハガキ買た 冬二  
 いろゐるな竜が賀状でやつて来た 寿美子  
 旧姓を書きそえてある年賀状 あいき  
 ゴチャゴチャとごたく並べた年賀状 肖二  
 無性だが年賀はがきで和をつなぎ 葛城  
 年賀ハガキ小さな夢を賭けてみる 雀踊子  
 また年賀悪運つよいと言われそう 凡九郎  
 年賀ハガキ左遷の初春を画に託し 滋雀  
 一年もまた繰り返えず年賀状 悦郎  
 借金を返せと書いてない賀状 美幸  
 零からの出発を期す賀状 醉々  
 明けまして年賀ハガキの嘘がくる 幸生  
 年賀ハガキやつつないでいるご縁 吸江  
 水仙が年賀ハガキに活けてある 夕花  
 足跡を年賀ハガキで初春の山男 滋雀  
 大晦日年賀ハガキが濡れている 岳人  
 七人の敵の中からくる賀状 勝晴  
 少し好きな男に年賀ハガキなど 恵美子  
 思いやり年賀ハガキをこぼれそう 恵美子  
 新年へ少し気負っている賀状 牧人

兼題「初日の出」

若本多久志選

菡 一 榮

床蹴つて起きるころにある初日 日満  
 人の和の中へ静々初日の出 曲ん手  
 手を合わす母の背丸い初日の出 メ女  
 ニッポンをニッポンにする初日の出 冬二  
 極道の眼に鮮やかな初日の出 鬼遊  
 借金を暫し忘れて初日の出 静馬  
 父母の雲が漂う初日の出 肖二  
 初日の出拝み日本人だなどと思う 女  
 初日の出無神論者も手を合わせ 幸生  
 山の男は山の初日の出と死ぬ 恵美子  
 ふるさとへ急ぐ車窓へ初日の出 牧人  
 初日の出心に赤は和を抱く 滋雀  
 初日の出今年に恋を掴めそう 夕花  
 初日の出ビルの谷間で掌を合わせ 一二三  
 初日の出拜んでからの寝正月 天笑  
 左遷の地今年を賭ける初日の出 夕花  
 初日の出父は明治の背を正し 牧人  
 初日の出やと夫婦になれました 恵美子  
 出稼ぎの父が帰つて初日の出 美幸  
 ビル夜警明けて拜んだ初日の出 滋雀  
 裏長屋せめて初日の日射入れ あいき  
 初日の出母港へ急ぐ海の人 伸生  
 丹前でもったいなくも初日の出 一三夫  
 瑞雲のそまつな初日が闇を割る 千世子  
 紋付きの老父の肩へ初日の出 敏郎  
 倒産の社窓も照らす初日の出 好郎  
 初日の出テレビで見とくことにする 古方  
 初日の出迎える心に翳りなく 百酒  
 部屋代のためた窓も初日の出 千万子  
 科学とは別におろがむ初日の出 百酒  
 初日の出先ず十字架を朱に染める 美幸

好きな女の肩ごしに見る初日の出 恵美子  
 ぎりぎりに借りて返した初日の出 弥生  
 お念仏唱えるのもいる初日の出 形水  
 遠洋の夫をまぶたに初日の出 儀一  
 童貞のように初日がいまのぼる 冬二  
 東天に神おわします初日の出 鬼遊  
 絵に画いたようには昇らぬ初日の出 多久志

兼題「羽根」

菊沢小松園選

羽子板へ羽根は個性の音で鳴る 祥月  
 ここだけの話に羽根が生えていた 一榮  
 子供からもらった羽根が役に立ち 藤持  
 羽根つきを大人がするから事故になり 柳信  
 羽根ペンで女医が器用に横なぐる 登美也  
 羽根をつく振り袖カメラが追いまわし どんたく  
 羽根つきで元日の顔墨がつき 幸  
 赤よりも緑の羽根をつけたがり 吸江  
 末っ子は親をからかう羽根でとぶ 維久子  
 少年の羽根は疑問符のまま飛ばず 弥生  
 王様になった気分羽根布団 蘭  
 羽根つけてやっても妻はよう飛ばず 度  
 物価高お金に羽根が生えてはいる 敏  
 羽根のよな女心が生えはいる 喜美子  
 糸図から消えた女の羽根蒲団 鬼遊  
 羽根トイに止めた詠びをば父にさせ 与呂志  
 嘘ついた日は羽根布団かけてみる 幸生  
 羽根ぶとんずりおちている子のベッド 庸佑  
 籠の鳥羽根を広げる空がない 好一  
 羽根つかぬ娘になつて縁遠く 多久志  
 追い羽根に嗜着の裾を忘れては 夕花  
 勝鬨をあげぬ軍鶏の羽根がぬけ 雀踊子



嫁に来た日も子が嫁ぐ日も坂をこえ 冬 二  
 途中下車出来ない坂が今日もある 伸 生  
 願掛けるただ一心の坂凍てる 牧 人  
 女ひとり越える石ころ多い坂 好 郎  
 五十坂安楽椅子が欲しくなり 曲 手  
 登りつめた坂で定年まっけてくる 柳 宏  
 上ることしか知らず坂道転げ落ち 漫 柳  
 幸せが見えずともよい坂登る 鎮 彦  
 恵方だと信じた坂を登り切り 千 子  
 人生はおもしろきもの上り坂 千 子  
 平凡な坂にも起伏の息づかい 滋 雀  
 それ見なはれ男坂で息が切れ 生々庵  
 (河井庸佑・整理)

### 50年度本社句会

#### ベストテン決定

トップは不二田一三夫氏

谷垣史好

昭和五十年(一月―十二月)本社句会の入選ベストテンは次のとおりで、不二田一三夫氏が二年ぶりにトップに返り咲かれた。しかし同氏の六十四句というのは、昨年のトップ・静馬氏の七十六句に比べると、かなり少ない。この集計を始めて五年になるが、第一回の四十七年はトップが八十三句であり、四十八年

は八十一句であった(何れも一三夫氏)。全般的にレベルが平均化してきたというところなのか。話題は何といつても夕花さんの活躍であろう。それに維久子さんが相変わらず堅実に上位を占められ、また花梢さんがベテラン健在を示された。そういえば五十年は国際婦人年でした。

▽五十年ベストテン(敬称略)―三句以内厳守による。ルール違反は失格。

- ① 不二田一三夫(六十四句)
  - ② 和田維久子(五十九句)
  - ③ 大路美幸(五十八句)
  - ④ 高橋夕花(五十八句)
  - ⑤ 中川滋雀(五十六句)
  - ⑥ 藤岡花梢(五十五句)
  - ⑦ 傍島静馬(五十三句)
  - ⑧ 若本多久志(五十二句)
  - ⑨ 小浜牧人(四十九句)
  - ⑩ 香川醉々(四十九句)
- 以下、十一位から二十位までは
- ⑪ 鬼遊(四十七句)
  - ⑫ 雀踊子(四十三句)
  - ⑬ 文秋(四十三句)
  - ⑭ 吸江(四十一句)
  - ⑮ 柳宏子(四十句)
  - ⑯ 岳人(四十句)
  - ⑰ 智子(四十句)
  - ⑱ 十止庵(三十七句)
  - ⑲ 生々庵(三十六句)
  - ⑳ 天笑(三十四句)
- なお天位入賞二回以上の方は次のとおり。
- ▽四回〓雀踊子、美幸、冬二▽三回〓静馬  
 岳人▽二回〓一三夫、多久志、維久子、水客  
 滋雀、一舟、百酒、夕花、庸佑、武雄、緑水  
 (20傑のうち全出席が15氏。やはり全出席

して毎月得点を重ねないと、勝ち残れぬということがある。句会出席奨励の意味からも、句会は休まぬようにしよう)

### 月間賞順位

(昭和50年度)

有信新之助

一月は齋藤三十四。二月は阪上十止庵。三月は正本水客。四月は若本雀踊子。五月は不二田一三夫。六月は城一舟。七月は若宮武雄。八月は宮西弥生。九月は欄蘭。十月は板尾岳人。十一月は内芝としよ。十二月は定金冬二(敬称略)各氏とも一回宛なので天位の数できまるわけだが、十一月までは雀踊子氏が絶対優勢だった。しかし土壇場の十二月句会で定金冬二氏が見事に逆転されたのである。

☆

### 50年度全出席者(敬称略)

- 傍島静馬・児島与呂志・河井庸佑・桑原喜風
- ・横地正彰・橋高薫風・中川滋雀・金井文秋
- ・野村太茂津・村田颯太・不二田一三夫・古川鶴声・葛城伊三郎・西田柳宏子・城一舟・竹中肖二・竹中綾女・和田維久子・浜田儀一
- ・大路美幸・高杉鬼遊・高橋夕花・板尾岳人
- ・河野君子・那須鎮彦・岩本雀踊子・小浜牧人・香川醉々・塩満敏

# 各地物壇

▼かならず原稿用紙にペン書きで文字は楷書。締切毎月末着便まで。21行以内。十七字以内の句に、下三マスに雅号。

## 川柳わかやま

太茂津報

妻だけは酔いたい訳を知っている  
 買いそうな客へ笑顔を作りかえ  
 吹き溜りで落葉緑の夢をみる  
 いざこざを流した心に見えた虹  
 男と男水に流した酒の味  
 作られた笑顔の中に居る孤独  
 巣を作る蟻は寄り道など知らず  
 水を得た魚のように恋芽ばえ  
 炎えつきて充ちたりていま紅葉散る  
 砕け散る波のいのちが儚な過ぎ  
 仕送りの水増し額を喜ばれ  
 おおらかな愛水臭いかも知れぬ  
 畑作る六十年を振り向かず  
 鐘られた笑顔の奥に向かす  
 鍵っ子の作文屋に話しかけ  
 名案は迷いの中の流れ星  
 巢作りのつばめの智慧を見上げてる  
 人柄が滲み出ている遺作集  
 名案を切札に持ち身構える  
 手作りに主人の里の味も入れ

富子 弘生 英子 芳童 千寿子 道夫 幸子 福水 那智子 武雄 与史 正博 富江 嘉江 としよ マサ子 和子 京子

## 京都塔の会

松川

杜的報

地の隙間湧いてるように蟻の列  
 慣れるだけ慣れ次の手考える  
 京の寺庭に裾ひき山取る  
 一瞬の隙へピシリと憎い口  
 殺陣師の目主役の剣が隙だらけ  
 あらそえぬ父は背中に見え  
 出棺へしきみを洗う雨の音  
 こちこちで入社だから辞めて行き  
 湯どうふへ京はだんだん冷えてくる  
 爪あとを残した雲の高すぎ  
 取調べ前科は馴れた口になり  
 君が代を異国で馴れぬ耳をもち  
 うっかりとハッスル相手の術に陥ち  
 隙のない背中を男持つている  
 浮き上る豆腐をすくうタイミング

## 川柳たけはら

森井

菁居報

一口多い民主主義という男  
 ちぐはぐな心をささぐる妻の酌  
 趣味同じゅうして凡夫婦  
 手作りの野菜を送る箱を撰る  
 ふっくらふっくら吸いこまれそら乳房  
 泣くこゝろが武器握り拳しは小さくとも  
 風のいろ見える気もする秋の笛  
 カーパーブカーパーブと共にある如し  
 奥さかと呼ばれてハイと答えとく  
 お社に神無月とは書いてなし  
 秋の幸みなんて家をさける時  
 再会のよろこびを知るレモンテイ  
 今日もまた変わりようない顔つづく  
 セールのひらめき茶房に来て拾う

永楽 管珠 蘇堂 王石 誠史 潮花 紫香 飛鳥 拓味 白溪子 和友 求芽 水客 杜的 松緑 鬼焼 静水 房子 文晴 笑子 不朽 蘭幸 凡女 紫光 文明 千代美 菁居

おまつりのたいこ楽しい音がする  
 親と子の遊戯へ秋の空が澄む  
 もの想う間に秋の雲所作を澄え  
 色眼鏡かければ白いものが無い  
 柿の実が真赤に熟れて過疎続く  
 群集にあきれ群集の中にいる  
 生きてるよろこび四季の花活ける

## 南大阪川柳会

文秋報

夕焼けに染り幸せだと思ふ  
 人生の夕悟らすも忘れ  
 鍵っ子へブラランコがゆれ夕焼ける  
 シックな男に泥臭い妻がいる  
 タオル持ち歩いてシックと縁遠い  
 シックな犯人に仕上ったモンタージュ  
 母娘ともシッカ家柄忍ばせる  
 脱皮したようにズボンが脱いである  
 親の家出たのは脱皮する積り  
 脱皮した男頭が低くなり  
 丸坊主になつたぐらいで納まらず  
 実印に償い重くのしかかる  
 償いの重さに負けた酒の味  
 へそくりでも償えぬ赤字出る  
 償いの重みが社運かたむける  
 約束を守る律儀が汗をかき  
 握手した温み約束信じよう  
 約束してから財布忘れよう  
 そろばんに合わせ先約忘れとく  
 やせる食事しばらくやって見たものの

愛 そのみ 貞路 のぼら 英詩 かつ子 肖二 好一郎 好二 十止庵 弘生 誓二 喜風 智子 綾女 鎮彦 恒明 雀踊子 一栄 万里 柳宏子 柳志 文秋 あいき 竹中 肖二報 雀踊子 古方

光明をみつつけてからの無我夢中  
夢中にまるとお耳が聞えなくなるの  
優勝のマイク夢中でしたをくりかえし  
夢中になれた頃の若さがなつかしい  
物価高夢中で挑む共稼ぎ  
兄への叱言が弟に向きを変え  
言訳は本署で聞くと取り合わず  
兄ちゃんのお古ばかりを拗ねている  
甘えたり拗ねたり刃のテクニック  
拗ねて寝た子の枕辺におく玩具  
宵寝することで厄日を終らせる  
前向きに生きて厄日に気付かない  
儲からんことも厄日にむすびつけ  
自制する折目厄日があつてよし  
ゴキブリもここは住み良い冷暖房  
ゴキブリの対話奥さん留守らしい  
追いつめたゴキブリ仏壇へのがれ

どんぐり川柳会

谷垣

鎮彦 三十四度 右近 喜風 誓二 儀一 肖二 綾女 恒明 智子 文秋 君子 好一 十一庵 史好報 あいき

愚痴こぼす父に若さがまだ残り  
人妻の恋が匂ってくる正午  
あすなる句会 (大阪市) 中村ゆきを報  
アンコール続けてなごりもり上げる  
ツケすんでマダム名残りをもう云わず  
受領書に薄いスタンプ押ししてくれ  
西国めぐり半分とばした朱印帖  
明日なら云える名残りの言葉呑み

菜の花句会

鬼遊報

美幸 史好 慶の助 ゆきを 恵美子 素郎 好郎 鬼遊報 智子 君子 弥生 美代 幸生 彌生 正彰 夕花 肖二 洋子 儀一 あいき

自転車も歩かせ話つきぬ仲  
家中を立たせて孫の歩き初め  
帰ぬ足をどめた菊へまた話し  
あせ道のはだしへ土の音がする  
歩くこと思えば汽車賃まだ安い  
スケッチへ富士はポーズを飾らない  
スケッチは未完のままで失恋し  
家計簿の落書き私だけの愚痴  
浜に書く想いが浪が消して去り  
落書にしようがった世相評  
落書の愛と云う字が上手すぎ  
あせつても夢のベタルは動かない  
下半身隠して人魚男窓い  
よく動く下半身なり椰子の下  
川柳たましま 稲田 豊作報 八陣 秀峰 枝葉 れい子 素水 孝子 康子 みのる 可住 百合子 与志 近江 となほ つや子

佳句地10選 (前月号から)

市岡 曉舟 選 美しい指 美しい絵が画けず 人間を裁く法衣は黒くなり 資本家を裁いて魚は死んでみせ 裁かれるのに座布団が敷いてある エンジンのからぬ顔で遅刻する 妻が押す荷車 唄が乗せてある 変人の作つた服が崩れない 札束が降つてベンチの夢が覚め なが有るなと立ち止まる白い杖 傘ひらくパチンコ玉がころげ出る 度正朗 不遊朽 鬼遊々 醉々 薫風 史好 林鶴 桂緑 本蔭棒 朗

好きですと蓼食う虫が言いました  
 憎しみも妬みも捨てた日の抜け毛  
 六段の調べ嫁るのが惜しゆうなり  
 かくされた父の美談に湧く勇氣  
 あの人も中年足を地につける  
 病む妻が夫に抜け毛見せまいとする  
 指切りの温く他人の妻となる  
 せせらぎの調べ小鳥の歌をのせ  
 生きる勇氣を子の寝顔から貰う  
 トゲ抜けた頃にあの人遠ざかる  
 あの人をかばう言葉を探さねば  
 ゆく秋を寒婦は抜け毛を手に入る  
 難しい調べものらしいお茶を丸め  
 病む母に勇氣をつけるウリ一つ  
 あの人と同じ音色の鈴を買う  
 物好きを徹底させてプロとなる  
 母の遺品になって抜け毛のついた櫛  
 まだ調べ終らぬ鏡を二つ持つ  
 川柳大阪 見島与呂志報

千翁 好啓 黄蕙 扇水 滿洲夫 林鶴 耐二 朝美 和草 鼓二 惠二 鴻峰 瀧光 曙風 白雲 安静 海人 笑風 本蔭樺 胡蝶 道子 眉水 洛醉 喜醉 六竜子 魚人 楽々 麥贊

妻と娘に旅のブランを委しとき  
 一泊のブランへ子の夢妻の夢  
 おふくろの味には勝てぬコック長  
 足を棒三億円に追いつけず  
 故里にもう葉ぶきの屋根はなし  
 振り分けの土産で着いた新幹線  
 目印の壁は疎遠を叱る彩  
 オーエスケー川柳会 大坂 形水報  
 着せて見て大きくなった子を見上げ  
 親の見栄着飾って歩く七五三  
 納棺へ好きな着物を着せておく  
 勲章を宝とする人しない人  
 二日酔いやみのように補出され  
 ビラビラに磨いて食べるのがおしくなつた柿  
 黒幕は熟柿の落ちるを蔭で待ち  
 屏越しの柿へ子供の声がする  
 二日酔い熟した柿もホロ苦く  
 柿餡酒の味まで秋にする  
 連休もテレビで金でも余し  
 連休も待っててくれなれないもつ余し  
 連休の連休ババのあぐらも嵩高し  
 連休が増えてレジヤのボタン変え  
 連休日パートは働かねばならず  
 連休に代休足してハワイ行き  
 連休明けの窓口で待つ用が出来  
 宝石とミンクにはさまれ女死す  
 洪柿でよし晩秋の景にする  
 川柳後楽 井上柳五郎報

徹舟 雅果 重人 呑歩利 敏峰 与呂志 聖地 一念 常夢 一成 栄一 真彦 博泉 千夢 正人 岳麓 登人 牧水 形水 入仙 弥生 郎郎 胡風 廉洋 恒洋

失意の日私の仮面がみつからず  
 舌を出し出し仮面まだ脱がず  
 下心のぞく酒杯に酔がさめ  
 菓子箱が手心くわえてくれと言ひ  
 下心あつてご無理がよくとおひ  
 偶然のあつてに逢せたら下心  
 ママ作る砂トネルをみな崩し  
 日の丸の神話崩れずストライキ  
 己惚れの崩れて無口の人となり  
 積木また崩して夢が養われ  
 風雪に旧家の土塀崩れかけ  
 崩れゆく初心を笑う都会の日  
 法事から嫁取りまで世話をやき  
 世話好きの出番待って忘年会  
 世話好きが走り廻って年の暮  
 南海電鉄川柳会 (大阪市) 辻  
 出張の名刺さされただけの事  
 出張もとんぼ返りにさす世相  
 出張中三度は云えぬ税吏の目  
 うちの人今どう出張ける出張先  
 気苦労を知らず出張れるが先  
 又出張ですかと妻のふくれ面  
 出張のついでで墓が遠すぎる  
 レポートのいる出張で落ち着かず  
 倒産の噂へアタフタ出張す  
 新幹線できて日当にした出張  
 世話女房出張度で疲れ果て  
 罪の子の出張指に耐え生き  
 玉の汗流す程にはむくわれず  
 一日の流れに私の運転席があり

照路 幽谷 武彦 夏志 陽志 定惠 照五郎 秋月 昌吾 雷山 久米雄 勝友 博友 圭水報 摩天郎 安子 柳信 千乃郎 和郎 綾女 十止庵 維久子 肖二 季贊 昌女 正彰 清女 鎮彦 弘生報

城北明朗句会

川口

弘生報

ライスカレー 食べても最後に欲しいお茶  
 来賓の祝辞に冷える二合瓶  
 ラッキーだったと免かれた事故返振る  
 芸術の裸女には媚びた笑はない  
 らっきょうを漬ける女に明日がある  
 ラッパ飲み出来る娘にお茶お花  
 ランチタイムの屋上ゴルフに擬っている  
 山小屋のランブへ明日の夢があり  
 安楽死ちらっと極めたことを悔い  
 楽天左遷の旅がうれしそう  
 ライバルの個展へ愛想のはめ言葉  
 住んでみて落雷多いこと知り  
 お見事な乱筆多謝がにくらしい  
 旅に来てうちの圓を恋しがり  
 補償賠償取らねば損の世相です  
 世は無情いかすとやもめが隣合  
 秋深し立田の川の紅葉狩  
 春秋に富んで強情なおらない

和歌山七面句会

中筋

三幸報

右近 芳二 誓酒 美幸 柳信 牧人 静歩 道子 太茂津 三十四 弘生 小路 満津子 繁子 秀村 ますえ

太茂津

口づけが昨日の人とまたちがい  
 ハンストの鼻に今夜はカレーです  
 敵味方分けてしまった影の声  
 駒つなぎ川柳会 岸 南柳報  
 熱すぎてゴメンゴメンのくせ直し  
 先約の隙を盗んだ膝枕  
 先約の余裕あとから来てすわる  
 ぬれ衣をかけてあげたい仲の良さ  
 ぬれきぬとはかり云えないわけもあり  
 上役の濡衣ばかり引き寄せける  
 云い訳も聞かずぬれ衣着せかける  
 濡れ衣かと思うまい私にも落度  
 濡れ衣がはれて刑事が神に見え  
 濡衣を明かす神仏現れず  
 どっちでもよい濡れ衣はだまっとく  
 ぬれ衣の体面デカの考えず  
 真直ぐ生きて濡衣気にしない  
 濡れ衣に負けてなるかとおつくす妻  
 濡れ衣に帰りたいくない里帰り  
 濡れ衣を着せられ地蔵しばれる  
 濡れ衣で妻の小言を背なで聞く  
 濡れ衣と信じているのは妻ばかり

大田川柳会

藤田軒太楼報

年の瀬を流れるままに逆らわす  
 年の瀬のもうこれっきり電気鋸  
 三億犯どう転ぶやら年の暮れ  
 年の瀬の新聞チラシを妊まされ  
 年越しのめどがつかないまま走り  
 もうあとへ引けぬ年の瀬冬枯れる  
 年の瀬が自宅待機のまま追まる  
 ストの為のストに年の瀬ゆさぶられ

多加子 三幸 南柳報 柳彦 茂子 恭太 石捨 誓二 育園 悟郎 綾女 儀一 肖二 つとむ 小路 善信 祇風 小松園 休二郎 虎秋 鐘堂 郁生 緑之助 軒太楼 独仙 暹児

お互いに涙で送る目別れる目  
 子や孫に手形のついた餅送る  
 例年の便りに送る富有柿  
 幾春秋送りし街にある想い  
 見送ったあの日限りの君とわれ  
 送る眼にハンカチ遠く点に見え  
 満腹へ好物無理に又食べる  
 好物を供えて困む一周忌  
 好物で死ねば本望ですふぐ料理  
 好物は蕎麦でその前はしう酒  
 好物を蕎麦でその前はしう酒  
 好物を覚えて眼鏡に叶う嫁  
 好物を生唾じつとためて待ち

虹川柳倶楽部

新聞回天子報

信濃路のそばもほどよし暮を待つ  
 買え買えとジングルがせき立てる  
 美人なら竜の化身も妻に持つ  
 クリスマスセールサンタが鈴で寄せ  
 店員にかすりの似合うそば老舗  
 運そばを二年がかりで食べおわり  
 本場ではそば食い競う腹もあり

故永宗宗義句集

高瀬

三五〇円(千共)

交叉する消火ホースの水煙  
 憎しみの解けて宇宙のドッキング  
 灰皿に貯つた程の思案出ず  
 土曜日のマージャン今日は出前そば  
 仏門に育ち聖薬を食べている  
 クリス마스サンタの爺さん来る眠り

祥月 白石 荻野 壮野 雷音坊 秀子 水煙 河南 孝太郎 早丘 三男 桃枝 虹汀 ひろ坊 実竜 岩光 一竿 三日造

・ 募 集 ・

★原稿は四百字詰原稿用紙に四枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

四月号発表表(2月15日締切)

川柳塔(10句) 若本多久志 選  
水煙抄(10句) 川村好郎 選  
愛染帖(3句) 正本水客 選  
課題吟(各題5句以内)

「新入社」 宮口 笛生 選  
「スピーチ」 松川 杜的 選  
「四月バカ」 黒川 紫香 選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

五月号発表表(3月15日締切)

川柳塔(10句) 若本多久志 選  
水煙抄(10句) 川村好郎 選  
愛染帖(3句) 正本水客 選  
課題吟(各題5句以内)

「善意」 小砂 白汀 選  
「鯉のぼり」 羽原 静歩 選  
「母」 森田 若人 選

3月は「生々楽天」刊行記念句会

定価 三百五十円(送料十六円)

半年分 二千九十九円(送料共)

一年分 四千二百円(送料共)

昭和五十一年一月二十五日印刷

昭和五十一年二月一日発行

大阪府南区鰻谷中之町二〇番地

編集兼 中島 蓬太郎

発行人 藤原 童心社

印刷所 藤原 童心社

郵便番号 5442

大阪府南区鰻谷中之町二〇番地

発行所 川柳塔社

電話大阪・二七一・一三九八五番

振替口座 大阪・三三三六八番

北川春巢追悼句会

日時 二月六日(金) 午後六時

会場 金属会館

南区鰻谷東之町10番地

電話 271・3935番

兼題 柳 話

席題 「北川春巢」

会費 三百円

★投句だけの方は切手百円封入

西戸 尾 古 栗 選

見島 与呂 志 選

川口 弘 生 選

中島 生々 庵 選

各題三句以内厳守

★電話での投句や訂正はご遠慮願います

大阪市南区鰻谷中之町20

川柳塔社

3月の兼題 「天絵」 「生踊」

会場変更

3月句会は8日(月)



・ペンペン草・

郵便料値上げ最後の抵抗

★1月25日から第三種郵便物の値上げが決定的になったので、なんとかして1月24日までに送本してやろうと、年末からエンジンをかけはじめた。ところが本

社副主幹北川春果氏が12月27日に急逝という悲報が長男の睦彦氏から拙宅へ電話連絡があった。急拠本号を「北川春果追悼号」に切り替えねばならない。例によって薫風、鬼徳、居人諸氏にその悲報を報告し、関

お役だてください

**アリナミンA**  タケダ

効能—肉体疲労時・妊娠授乳期・病中病後のビタミンB<sub>1</sub>補給、脚気、神経痛、筋肉痛、腰痛、肩こりの緩和

☆食後すぐおのみください。☆25ミリ錠

係各方面への連絡方をお願いしたが、ぼくにも難用がどつと降りかかってきた。そんな中で二月号の追悼原稿の依頼である。さて、24日までに発送出来るかな。

句集「聴診器」前後

★昭和49年9月21日の昼すぎ、春果氏から拙宅へ電話がはいった。「急に頼みたいことが出来たので今日ぜひ会いたい」とのことである。春果氏は非常に謙虚な方で、大病院の院長をされてきた方とは思えぬほど腰のひくい人だった。誰からも尊敬され、とくに本誌などへの原稿も、学者としての「完全癖」を發揮され、

▼葉子コーナー

▼去年から不景気風が一向に弱まりそうになくその上、南からのホンコン風が流感を持ち込みダブダブパンチを受けました。  
▼多くの柳友の方がダウしし救急車を使われた人もいらしゃると聞きます。病弱な私が一番軽症だったように思います。  
▼皆様どうぞお気を付けて下さいませ。

路郎先生もこの点はいつも感心しておられた。そして決して他人に無理を云わないう方が、前ふれもなく「今日会いたい」とは、まほどのことと察し、指示された天王寺ステーションビル二階の喫茶室へ走った。

★句集の話だ。胃が悪いので入院することになったが、手術となれば、どんなことが起きるかも知れない。そこで一切任かせるから、12月初旬あたりに本にしてもらえないか——とのことであった。9月22日、23日は連休だから、一応原稿をまとめ、24日に本社まで持って行くから、あとは長男と相談してほしいとのこと、なぜか胸が騒いだ。

★春果氏はその時すでに、「覚悟」をしておられたようであった。その日、別れぎわに「入院することは絶対秘密に」と強く釘をさされたのである。しかし生々庵主幹にはすべてを申しあげておいた。

★それから二、三日してぼく宛に封書が届き、入院する室があったのでこれから病院へ行くが、本が出来たらこの人たちに送ってほし

明くる楽しく、どこでももうたえるわたしたちの歌をお寄せください。

入選作の作曲は専門家に委嘱します。三番ぐらにおまとめください。入選作一名に一万円、佳作三名に千円宛。締切は51年2月末日。(著作権は川柳塔社に属します) 送り先は本社「川柳塔の歌」係。

〈川柳塔の歌〉を募集

いと、九十九名の内外川柳関係の氏名が便せんに書かれてあった。

★ぼくは句集などを頼まれると、まずその服装などを見て、その人の身につけている色柄によって表紙などの色を考える。春果氏は茶系統のものが多かった。しかし、わざと濃い緑色を表紙にした。常磐樹——生氣発らつたの緑——そんな願いを表紙の色にこめたのである。クソノ選句集にしてなるものか、とおもった。

★ぼくがこんなことを書くに笑われるだろうが、春果氏宅の電話番号がそのころ「4442」だった。「死—死—」と読んで、この句集のご依頼をうけた時から、胸に何か暗い影をのんだような気がしたのである。しかし入院してからまもなく、現在の「五五〇

八」へ変更のご通知を受けた。こんどは「GO・GO 白丸の末広がり」と縁起よく解したのである。

★「聴診器」は春果氏の退院後に出来た。ほんとはよかつたと思つた。まずほんこんでくださったことは何ごにもかえられないうれしさでいっぱいだった。その「聴診器」も売り切れたことを一月号に出したことがなかったようである。

★実は、四月号から雑誌選者の交代で、新年号の予告にも、一珠の不安があったものの、ひたすらに「全快を祈りつつレイアウトしたのだが……」。

★あ、顕照院釈宝医居士

★氏の告別式から帰ってコレを書いて別。

★寒中お見舞い申しあげます。(不二田一三夫)

★寒中お見舞い申しあげます。(不二田一三夫)

昭和四十一年一月二十九日印刷  
昭和五十一年二月二十五日発行  
昭和五十三年三月二十五日発行  
創刊大正十三年通巻五八五号

あたたかいご家庭へ、あたたかいおみやげ!

豚焼 饅売  
焼餃子  
又焼饅

豚まんの王様、やき豚入り



大 阪・なんば



TEL(641)0551-2



<出張店> なんば高島屋/虹のまち鹿鳴/心齋橋そごう/梅田阪神/天満橋松坂屋  
京阪デパート/堂島地下センター/中之島サン・ストアー/なんば新川店/奈良近鉄百貨店

姉妹品大和錦印



柔道衣  
剣道具

警察庁・警視庁  
全国府県警察  
大阪府警察本部  
講道館・御指定

早川繊維工業株式会社  
大 阪 支 店

大阪市天王寺区伶人町29番地の1  
電 話 (779) 1690~2番

定価 三百五十円 (送料二十九円)

川柳塔

二月号